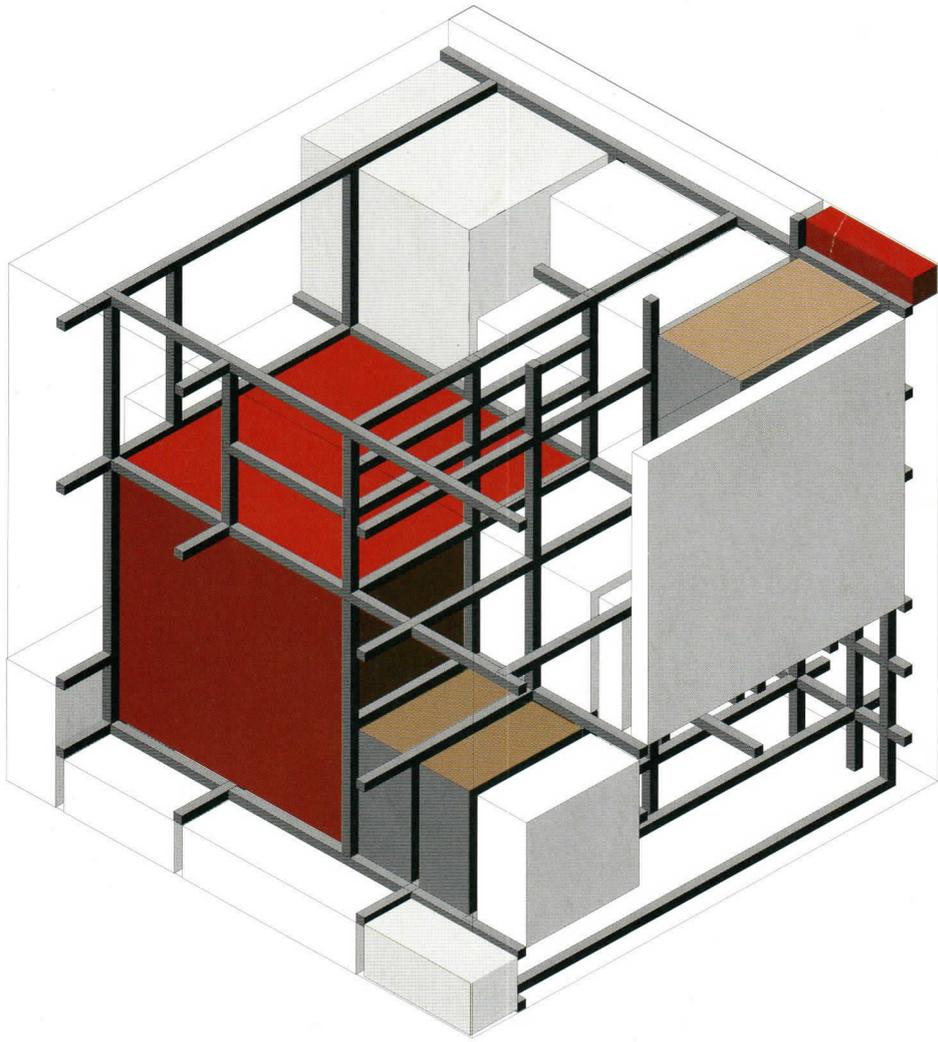


NICHE

工 学 院 大 学 建 筑 学 科 同 窓 会 誌



vol.23 1999

okamura

よい品は結局おトクです



●オカムライメージキャラクター
ヒロコ・グレース

アプション Aption

... FOR TEAM SETTINGS



チームの特性や行動原理に対する研究と使い勝手優先の発想から生まれた、チームの成功を呼ぶカンタン環境ツール「アプション」。チーム・ダイナミズムを積極的に支援する柔軟な構成能力はもとより、優れた施工性やワイヤリング機能、中長期的視点に立った転用性、そして卓越したコストパフォーマンスを実現しています。

新宿支店

〒163-0808 東京都新宿区西新宿2-4-1 新宿NSビル
TEL: 03(3343)8411 FAX: 03(3343)8419

よい品は結局おトクです

オカムラ
株式会社 岡村製作所

お問い合わせ・ご相談は [お客様サービスセンター]へ...  **0120-81-9060** 月曜～金曜 (祝祭日を除く) AM9:00～PM6:00

©インターネットでオカムラの最新情報をご覧ください。[OKAMURA TODAY] <http://www.okamura.co.jp/>

C O N T E N T S

02 「工学院大学校友会VISAカード」ご利用(切替え)のお願い

03 『NICHE』vol.23発刊によせて

同窓会・校友会の目指す方向.....高木雅行(建築学科同窓会会長)

04 記念体育館プロポーザル

最優秀賞に、田中栄作案

13 TOPICS

第13回校友会全国大会 島根県松江市で開催

「4大学大学院オープン・スクール」開講

建築学科同窓会通常総会の開催

大交流懇親会の開催

建設大臣賞に、小椋祥司さん—第16回住まいのリフォームコンクール

宇田川先生、日本建築学会賞を受賞

17 同窓生を訪ねて

麗しきフィジー.....坂上みつ子

23 輝かしき先輩たち

山本鑑之進/日本近代建築史の重要な場面に立ち会った

27 同窓生からの便り

住宅・都市整備公団での30年.....櫻井志朗

女性の立場から建築業務に携わって(家庭との両立).....花木花

ここ10年のこと.....最勝寺靖彦

経験した海外の建設工事/CM業務.....中村隆彦

21世紀はリフォームの時代.....平井裕一郎

「学ぶ」ということ.....中島美果

39 建築学科の新しい風に聞く.....後藤 治、久田嘉章

41 また違う日まで

難波蓮太郎先生

建築学科同窓会役員・校友会役員・建築学科同窓会運営委員名簿

第32期事業報告・一般会計報告・運用財産目録/第33期事業計画・一般会計予算

建築学科同窓会運営・活動費および同窓会誌『NICHE』に関する寄附金のお願ひ

賛助金者名簿

工学院大学校友会会員名簿CD-ROMのご紹介

平成9年度卒業生名簿

建築学科卒業生居住地分布図

発行.....平成11年12月20日

編集・発行.....工学院大学建築学科同窓会

東京都新宿区西新宿1-24-2

03.3342.1211 内線2025

編集委員.....

伊藤真人・大場光博・静賀正樹

高木雅行・谷口宗彦

編集協力.....齋藤陽久

印刷.....大日本印刷株式会社

表紙イラスト.....楨原哲生

(大学院工学研究科建築学専攻修士課程1年)

年会費を支払わないと 『NICHE』が届かなくなります!!

.....

建築学科の卒業生の皆様へ

拝啓 皆様方におかれましては、時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年度より、同総会費は財源確保の点から、年会費とすることになりました。しかし、入金手続きの手間などを考えますと、各年の徴収は困難が伴います。そこで、校友会では「工学院大学校友会VISAカード」を発行し、同総会年会費の自動引き落としなど手続きの簡素化を図りました。同時に、今後の同総会を維持発展させていくための財源確保と、あわせて同カードの利用による会員に対する新たな特典を検討しました。

このカードは、本校の卒業生を対象としましたオリジナルカードで、平成10年現在、入会対象者は建築学科のみで約1万4,000名近くにおよんでおります。卒業後の皆様と母校を結ぶ絆として活用していただきたいと考えておりますので、このたびのご案内の機会に、ぜひご加入いただけますようお願い申し上げます。なお、すでにお持ちのVISAカードから「工学院大学校友会VISAカード」への切り替えは、取扱銀行にて簡単にできます。

—という願いを『NICHE』の前号(vol.22)で声高にしたのですが、はかばかしくありません。このまま会費完納、またはVISAカード加入や切り替えをしていただかないと、本当に『NICHE』を送付できなくなります。

かつてない不景気で世紀をまたぐことになった不運はわかりますが、ボランティアで『NICHE』を編集している教職員や卒業生だって同じ地平にいるのです。

どうぞ、速やかに「工学院大学校友会VISAカード」への加入ないし切り替えの手続きを取っていただき、末永く『NICHE』を見守ってってください。

年会費のお支払いは、割引料金をご利用下さい。

◆従来通りの送金方法(振込など)は昨年から年会費4,000円です。しかし、事務手続き簡略化のため「工学院大学校友会VISAカード」利用による年会費の自動引き落としは、**割引料金3,000円**となります。このカードの会員は同総会費を年1回自動引き落としいたします。

従来からのVISAカードの特典に加え、校友会カードとしてのオリジナル特典

- ◆一級建築士受験講座などの受講割引特典が希望者に与えられます(希望者に直接ご連絡の予定です)。
- ◆同総会のさまざまな情報を満載する『NICHE』を、毎年、自動的にお届けします。専門的な業務に携わるOBたちが、どんな仕事に対面し、どんな問題に直面しているか。皆様のご意見をもとに、校友相互の情報交換の場を提供します。
- ◆校友会名簿CD-ROM(約10万人の校友の連絡先を収録)の割引購入(定価3,000円のところ、カード会員は1,500円にて頒布いたします。毎年バージョンアップ)ができます。学年別、研究室別はもとより、全学科OBを含む、会社別、地域別検索可能。同総生同志のネットワークに役立ちます。
- ◆引っ越しの際の同総会名簿の住所移動手続きが不要となります。

□問い合わせ先：**工学院大学校友会**

〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2

tel. 03-3342-2064

同窓会・校友会の 目指す方向

高木雅行 (建築学科同窓会会長)



8月6日、7日と工学院大学校友会100周年記念 第13回校友会全国大会・島根大会が500名を越える卒業生とご家族、ご来賓の先生方のご出席により盛大に開催されました。建築学科同窓会の会員が多数を占める島根の役員の方々には3年間にわたる準備期間、本当にありがとうございました。当日はご夫人同伴の出席者が多く、役員の方方も接待役として大活躍をされておりました。そうした姿を通し、建築や電気といった卒業時の区分はあまり重要なことではなく、大切なのは同じ工学院で学んだ仲間、家族も含めて同じ仲間との意識だと強く感じました。

現在、各同窓会をその役員を選出母体とする社団法人工学院大学校友会は、従来その事業費の大半を卒業生への連絡や懇親を目的とする事業に費やしてきました(同窓会も同じ)。今回公益法人を認定する文部省より「公益法人は積極的に不特定多数の者の利益の実現を目的とするものでなければならず、同窓会、同好会等構成員相互の親睦、連絡、意見交換等を主たる目的とするものは、公益法人として適切でない。今後、その事業費の50%以上を公益的目的に改めなければ継続できない」と言ってきております。社団法人(一定の目的のために組織された団体)である本校校友会においてはその事業の大半を母校に対する援助等の目的にしなければならないということです。卒業生の組織は、1888年(明治21年)校友会の前身である「工談会」が発足し1899年(明治32年)には工手学校同窓会として発展し、1917年(大正6年)には財団法人として認可を受けました。戦争による中断期を経てそれまでの親睦が主目的の同窓会から母校振興を目的とする校友会として再スタートをしました。そして1960年(昭和35年)「社団法人」と法人化し本年設立100周年を向かえました。その間教科書の出版、学用品販売部、食堂の運営、工手学校から工学院(専門学校)への昇格への建議書を経ての母校の工業専

門学校化、学園100周年記念事業の募金など継続的な母校への支援。また新宿再開発を可能にした三角土地取得も本同窓会の伊藤真治校友会総務部長(当時)の尽力によるものでした。いま我々の時代で多くの先輩達がつくり上げて来たこの歴史を止めるわけにはいきません。

冒頭でお伝えしたように、全国の各地域で行なってきた懇親会などは各同窓会が受け持つべきと考えます。また、現在の校友会のもつ「母校へ貢献する部分」をより発展させ、公益的の事業を主目的とする新しい組織をつくる必要があると考えます。

母校の発展には何が必要か、第一に社会が必要とする一流の学生を輩出する。第二にその学生を育てる一流の教員がいる大学になることではないでしょうか。「中国の科学と平和の砦」とされる工学部が中心の総合大学である中国・東北大学の赫(かく)学長は教育についてこう述べています。それは人間と人間との関係であり、大切なのは教師であると。学生の学力人格の向上も、教師のいかんによって決まる。そして「一流の学生」を輩出したければ、「一流の教師」を準備せよと。また、さまざまな家庭環境の違い、先天的な違い、後天的な違いのある学生に対する教師の対し方については、一番大切なこととして、いかなる学生にも「平等に教育の機会を提供」することとし、次に大事なことは、すべての学生を最優秀に育てることはできないしその必要もない、それはすべての学生を、何らかの点で「社会に貢献できる人材」へと育てることと述べている。私はこの視点こそがもっとも重要な点と考えます。私たち卒業生による新しい社団法人が21世紀の母校を担う先生方のさらなる成長、発展へのお手伝いができるよう取り組みたいと考えます。どうか建築学科同窓会の皆さまには今後ともご協力をお願いいたします。

最優秀賞に、田中栄作案

「学校法人工学院大学学園創立115周年記念体育館基本設計」のプロポーザルコンペの最優秀賞に、田中栄作案が輝いた。

この記念体育館は八王子キャンパスに建設され、「学園の創立115周年を記念し、学生のスポーツ活動、教育、体力づくり、指導者の育成、研修の拠点であると共に、入学式、大学祭、イベントなどにも利用でき、かつ八王子キャンパスをシンボライズする記念総合スポーツ施設を建設すること」と計画の趣旨はうたっている。

■プロポーザルの実施に当たって 大橋秀雄 (工学院大学・学長)

「学校法人工学院大学学園創立115周年記念体育館基本設計」のプロポーザルコンペの最優秀賞に、田中栄作案が輝いた。

この記念体育館は八王子キャンパスに建設され、「学園の創立115周年を記念し、学生のスポーツ活動、教育、体力づくり、指導者の育成、研修の拠点であると共に、入学式、大学祭、イベントなどにも利用でき、

かつ八王子キャンパスをシンボライズする記念総合スポーツ施設を建設すること」と計画の趣旨はうたっている。

プロポーザルは「本施設に対する基本的な考え方について提案を参加者に求め、業績や代表作品などと合わせて検討し、もっともふさわしい設計候補者を選定すること」を目的とし、応募資格には「本学園の卒業生が代表者である建築設計事務所で、2,000㎡以上の公共施設の建築実施経験があること」など掲げられていた。

応募登録締切りが1999年(平成11年)6月10日、提出書類の締切りが7月10日。38点の応募があった。

審査は、第1段階(7月14日)で、無記名投票にて最初に11作品を選定、さらにヒアリングを行う5作品を無記名投票にて選定した。そして第2段階(7月16日)で、5作品の設計者を対象に、プレゼンテーション15分、質疑応答15分を行なった後、無記名投票にて最優秀賞を選定した。

なお、記念体育館は2001年2月に竣工の予定。「学校法人工学院大学学園創立115周

年記念体育館基本設計」のプロポーザルコンペの最優秀賞に、田中栄作案が輝いた。

■審査講評

山下司 (工学院大学建築学科教授)

●作品番号35：田中栄作案

プロポーザルの趣旨に対応した外観、空間、機能を創出した作品として、得票点が最も高かった。第1体育室と第2体育室をL型に配置し、その上に緩やかにカーブした大屋根を架けた構成は、本計画地の風景に程良く調和し、キャンパス全体の最高地点に建ち、かつ入学式などの感動的なイベントにふさわしいモニュメンタリティと記念性を併せもっている。

空間構成においても、多人数の利用にふさわしいアプローチ空間の広がり高さをもち、深い庇のつくる豊かな外部空間は魅力的で、多様な利用が期待できる。要求空間に対する平面、断面構成も適確であり、メンテナンス、室内環境などについても、考慮がなされている。

■審査結果

●最優秀賞 LINK建築工房

●優秀賞 空間設計研究所

久米設計

西村建築設計事務所

松田平田

●入選 アリミテアーキテクツ一級建築士事務所
(協力)ゾー設計室 エフオービーアソシエーション

ヴァーミリオン

エル建築研究所

一級建築士事務所 小高都市建築研究所

一級建築士事務所 丸山千春建築・都市研究所

山下設計

田中栄作

高橋孝栄

児玉耕二

西村 武

西川東吾

遠藤昭彦

西尾順文

加藤隆弘

小高浩義

丸山千春

船越康弘

■審査委員会

●審査委員長 学長

●審査委員 名誉教授

名誉教授

学生部長

八王子整備実行部会メンバー・建築学科教授

◇

◇

◇

◇

◇

◇

八王子校舎アドバンスマテリアルセンター設計・監理者

◇ セミナーハウス松風舎設計・監理者

◇ テクノクリエーションセンター設計・監理者

◇ 教室棟設計・監理者

大橋秀雄

波多江健郎

荻原正三

松波慎介

山下 司

望月大介

谷口宗彦

澤岡清秀

廣澤雅也

嵩 英雄

望月 洵

濱田昭夫

尾関勝之

平井真夫

山本圭介

問題点は、トラス構造を含め造形的な整理が必要であり、正面、サッカーグラウンドに面した立面のさらなる検討改善が望まれる。

●作品番号13：児玉耕二案

古代ギリシャの「ギムナシオン」をデザインアイデアとした点、第1体育室と第2体育室の間に設けられた「ユニバーサルステージ」は魅力的である。また、敷地周辺の5号館群の建築コンテキストへの調和は共感できる。

しかし、今回のプロポーザルの趣旨に対して、消極的構成と見受けられる。第1体育室の空間はフラットなボックス空間であり、入学式などの記念的な行事には感動的空間とはなりにくいのではないか。また、第2体育室を地下に設け、その屋上がアプローチ空間となり、ゲート型の空間を構成しているが、キャンパスの最高地点に建つ建物として、スカイラインに魅力が感じられないと同時に、地下の柔・剣道場は採光・換気その他に疑問点が残るのではあるまいか。提案の「ユニバーサルステージ」もリアリティに疑問を感じさせる。

●作品番号04：西川東吾案

極めて明快な平面構成、屋外劇場のステージ共有、美しい緩やかなカーブのグリーンアーチなど、たいへん魅力的で記念体育館としてのイメージを強く印象づけることに成功している。

しかし、主空間をGLより6mほど下げたことによって、種々の問題点が生じている。柔・剣道場の採光・換気の問題、土工事の増大、入学式などの記念的イベント空間に降りてアプローチするなどの点。また、アーチ状の屋根を柱によって支えるなど、コスト上の配慮だったのであろうが、形態的論理性が失われているように感じられる。

●作品番号05：高橋孝栄案

南北軸を強調し、第2体育室を1階に第1体育室を2階に配置したシンメトリーな空間構成は明快であり、本施設の主空間である第2体育室をチューブ状の空間構成とし、南北軸に大きく張り出している外観は強いイメージを与える。第1体育室を2階に

持ち上げているため、GLレベルにスペースの余裕が生まれ、隣接施設との良い関係をつくり出している。

しかし、2階にある主空間へのアプローチがふたつの階段に分断され、入学式などのイベントの時、また緊急時に動線上の問題があり、キャンティレバーの床構造、テフロン膜の屋根構造など、解決すべき問題点が多い。

●作品番号07：西村武案

与えられた敷地をフルに埋め尽くした平面計画は、オーソドックスで大きな欠点はない。しかし、バス・アプローチの脇からのメイン・エントランス、それによって作り出される正面ファサードには記念体育館としての魅力が感じられないと同時に、機能的にも問題があろう。

部室棟との連絡、ウォームアップ・テラスなど他施設との連携などで体育施設としての機能性への配慮が感じられるが、膜屋根のメンテナンス、建築面積の増大によるコストアップなど、問題点が多い。

■応募者一覧

作品受付番号	応募事務所名	代表者名	作品受付番号	応募事務所名	代表者名
01	一級建築士事務所 金田松原設計	金田昭治	20	エル建築研究所	加藤隆弘
02	石本建築事務所	古山六男	21	連設計	武智昭雄
03	建築設計工房	秋元敏雄	22	共和設計	坪田丞司
04	松田平田	西川東吾	23	アルメディア	田畑和久
05	空間設計研究所	高橋孝栄	24	丸山千春建築・都市研究所	丸山千春
06	エヌ・ティ・ティ・ファシリティーズ	安川哲親	25	小高都市建築研究所	小高浩義
07	西村建築設計事務所	西村 武	26	植木設計事務所	植木秀視
08	浅見設計事務所	浅見欣司	27	江角建築事務所	江角俊則
09	梓設計	桜井照一	28	創元設計	菊井博之
10	TKK建築研究所	高橋正孝	29	山下設計	船越康弘
11	牧戸建築環境設計事務所	牧戸捷弘	30	アトリエインパルス	小倉将宏
12	ヴァーミリオン	西尾順文	31	岡本宏平建築設計事務所	岡本宏平
13	久米設計	児玉耕二	32	アリミテアーキテクツ一級建築士事務所 (協力)ゾー設計室 エフォーバーアソシエーション	遠藤昭彦
14	設計集団 閃	松田幸吉	33	A.P.I 建築計画総合研究所	直井俊次
15	草野建築設計事務所	草野 武	34	山陽都市設計	高井富弘
16	藤井建築工房一級建築士事務所	藤井 稔	35	LINK建築工房	田中栄作
17	新建創	岡野 宏	36	海谷設計事務所	梅谷 寛
18	アイエムユウ建築設計事務所 (共同設計者)シノックス建築研究所	山根秀明	37	テラダ設計	寺田正堯
19	佐藤総合計画	梶 徳治	38	ゲン建築事務所	二瓶哲郎

田中栄作案

受賞の言葉

八王子キャンパス 体育館プロポーザル 応募案について

田中栄作 (LINK建築工房/1979年度建築学科卒業)

最優秀案に選ばれて、キャンパスに自分の作品を残せる光栄と、また自分の作品で良いのだろうかという不安が同居しているのが正直なところの心境です。現在、実施に向けて準備段階ですが、もう一度、初心に戻って設計の基本的な考え方を振り返ってみたいと思います。

この体育館は、工手学校から数えて115周年の記念事業として企画されています。したがって、どのようにシンボル性を高めるか、イメージとしての若さのもつ躍動感・飛翔感をどう表現するかということが念頭にありました。

シンボル性については、遠望できる高さの5号館に対して、丘の上という条件から、水平性の強調ということで両者のシンボル性の共存を図っています。若さの表現については、丘の上から飛び出そうとする翼のイメージをもたせ、併せて本学の工学的なイメージを高めようと計画しています。また、穏やかなシルエットは、八王子の山並みとも調和すると考えています。

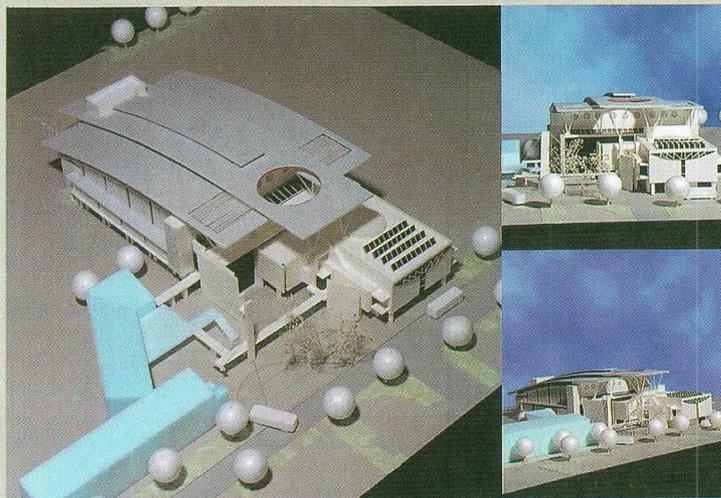
配置計画は、キャンパスの既存の軸線を強調した計画とし、部室前庭との一体化を図り、体育ゾーンの共通の広場としています。さらに、この広場に面して管理部門、アスレチック部門を配し、管理のしやすさと同時にスポーツへの親しみが増すように計画しています。

プロポーザルを企画していただいた学科、同窓会、校友会の方々に深く感謝するとともに、より一層、気を引き締めて実施設計に取り組んでいきたいと思っています。

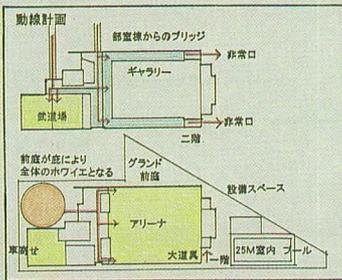
学園創立115周年記念体育館プロポーザル応募案

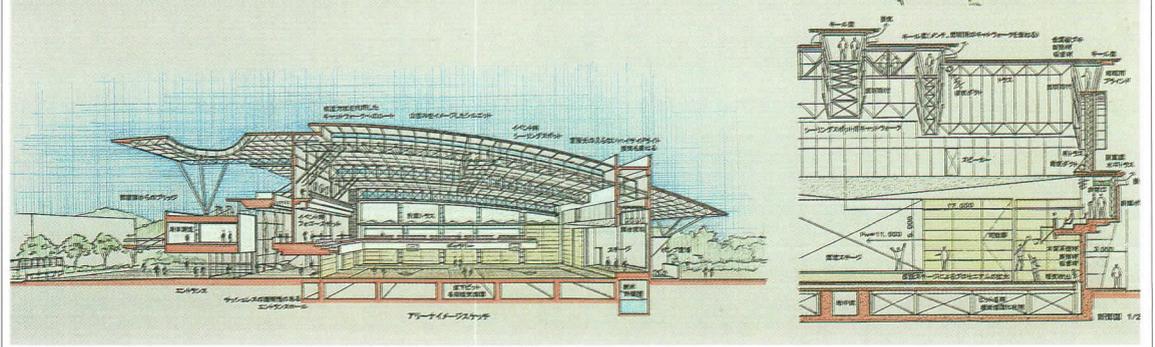
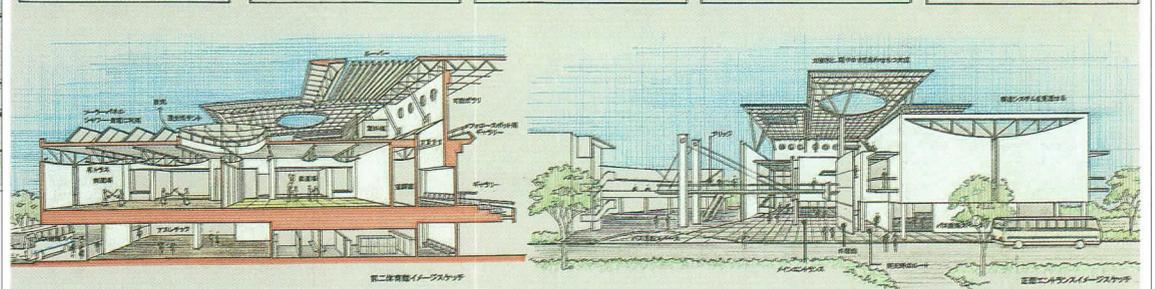
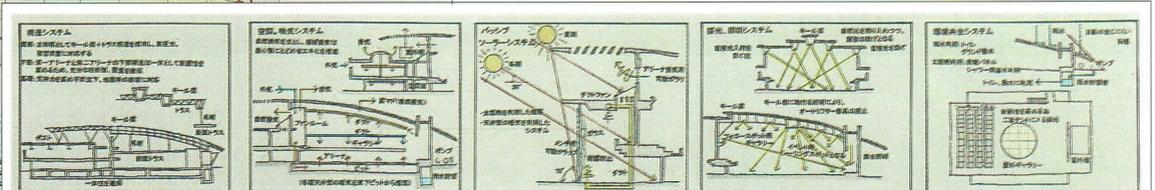
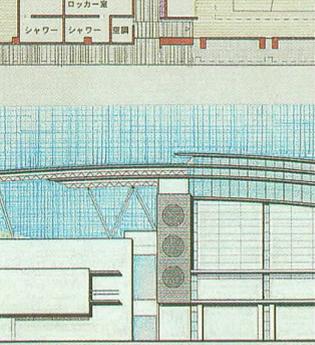
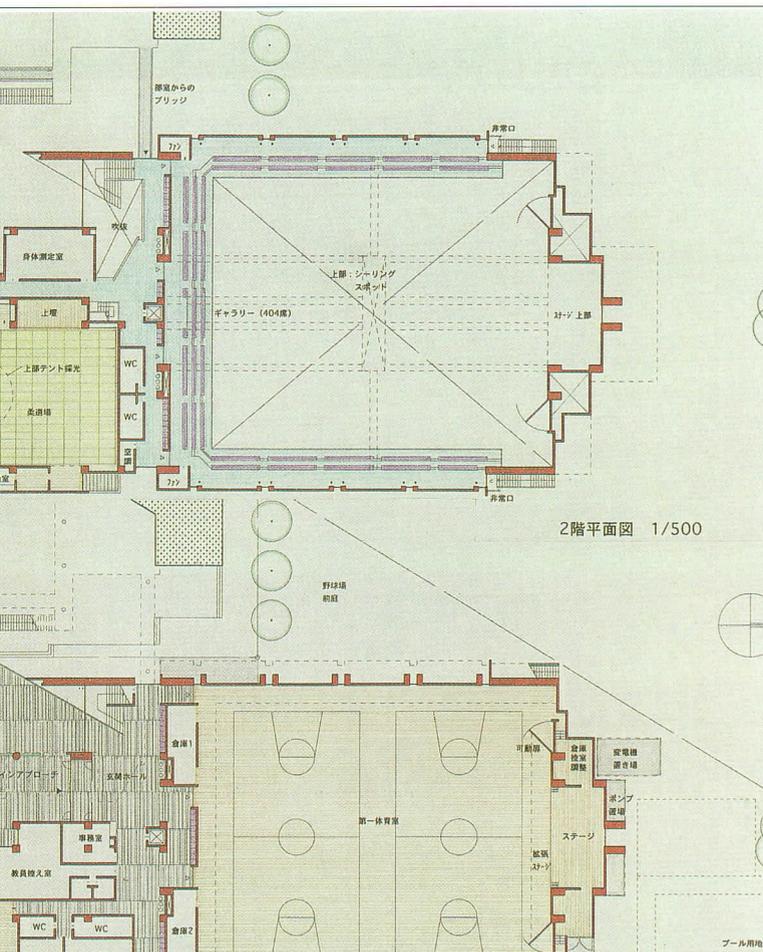
基本理念

- 21世紀に向けて学園の発展を象徴する建築にしなければならない。
- また、本学のもつ工業技術の蓄積をもあわせもった建築でなければならないと考える。
- さらに、学生の若々しさ、力強さを建築表現すべく、次のような趣旨を基本としている。
- ・工業技術の表現 : コンピューター技術の進歩により、複雑な構造も可能となっている現代を表現する。
- ・自然との共生 : 自然のメカニズムを利用した建築計画、設備計画とする。
- ・体育ゾーンの形成 : 既存部室棟、グラウンドと関係重視した計画とする。また北側敷地は、プールゾーンとして残してある。
- ・丘の上の三枚の翼 : 八王子の山並みを意識した、軽やかな翼の飛翔感、発展性を表現。



1階床面積	小計	2階床面積	小計	3階床面積	小計
第1アリーナ	1360.00	ギャラリー	442.48	階段室	8.50
ステージ	88.90	小計	442.48		
倉庫	78.00	動運棟	299.18		
小計	1528.00	倉庫	10.50		
アスレチック	250.38	小計	309.68		
倉庫	8.50	動運棟	299.88		
小計	258.88	倉庫	10.50		
養育室	30.50	小計	310.18		
音楽室	81.80	柱室	18.80		
小計	112.10	小計	19.80		
ロッカー	85.00	身体測定室	59.28		
小計	85.00	小計	59.28		
その他	313.64	その他	239.90		
小計	313.64	その他	239.90		
合計	2298.05	合計	1381.30	合計	8.50





高橋孝栄案

[空間設計研究所]

TUBE

この建物のコンセプトは「チューブ」である。この建物は、都市の中心部にあり、周囲には高層ビルが立ち並ぶ。この建物は、周囲のビルと調和し、かつ、独自の個性を表現するために、チューブの形状を採用した。チューブの形状は、都市の中心部にあり、周囲には高層ビルが立ち並ぶ。この建物は、周囲のビルと調和し、かつ、独自の個性を表現するために、チューブの形状を採用した。

LANDSCAPE DESIGN

この建物のランドスケープデザインは、周囲の環境と調和し、かつ、独自の個性を表現するために、チューブの形状を採用した。チューブの形状は、都市の中心部にあり、周囲には高層ビルが立ち並ぶ。この建物は、周囲のビルと調和し、かつ、独自の個性を表現するために、チューブの形状を採用した。

SECTION SH-1600

PLANS S-1600

STRUCTURE DIAGRAM

EQUIPMENT DIAGRAM

AREA DIAGRAM

児玉耕二案

[久米設計]

スピリット 「はだかの体育館」

「はだかの体育館」は、裸の人間が裸で活動する場所である。この建物は、周囲の環境と調和し、かつ、独自の個性を表現するために、裸の人間の姿をモチーフにした。裸の人間の姿は、都市の中心部にあり、周囲には高層ビルが立ち並ぶ。この建物は、周囲のビルと調和し、かつ、独自の個性を表現するために、裸の人間の姿をモチーフにした。

基本コンセプト

1. ランドスケープによるネットワーク
2. エネルギーあふれる環境づくり
3. 置換可能なプログラム

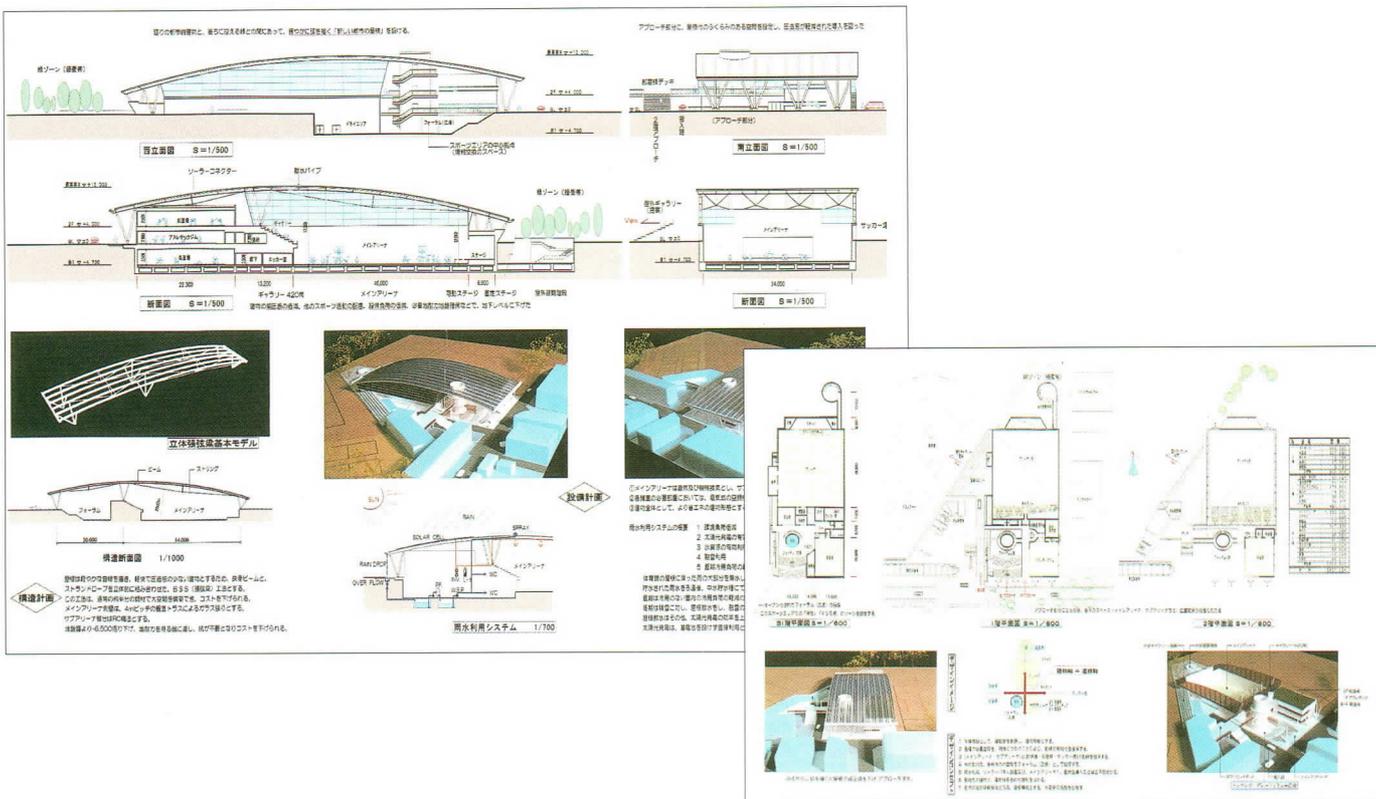
ランドスケープによるネットワーク

エネルギーあふれる環境づくり

置換可能なプログラム

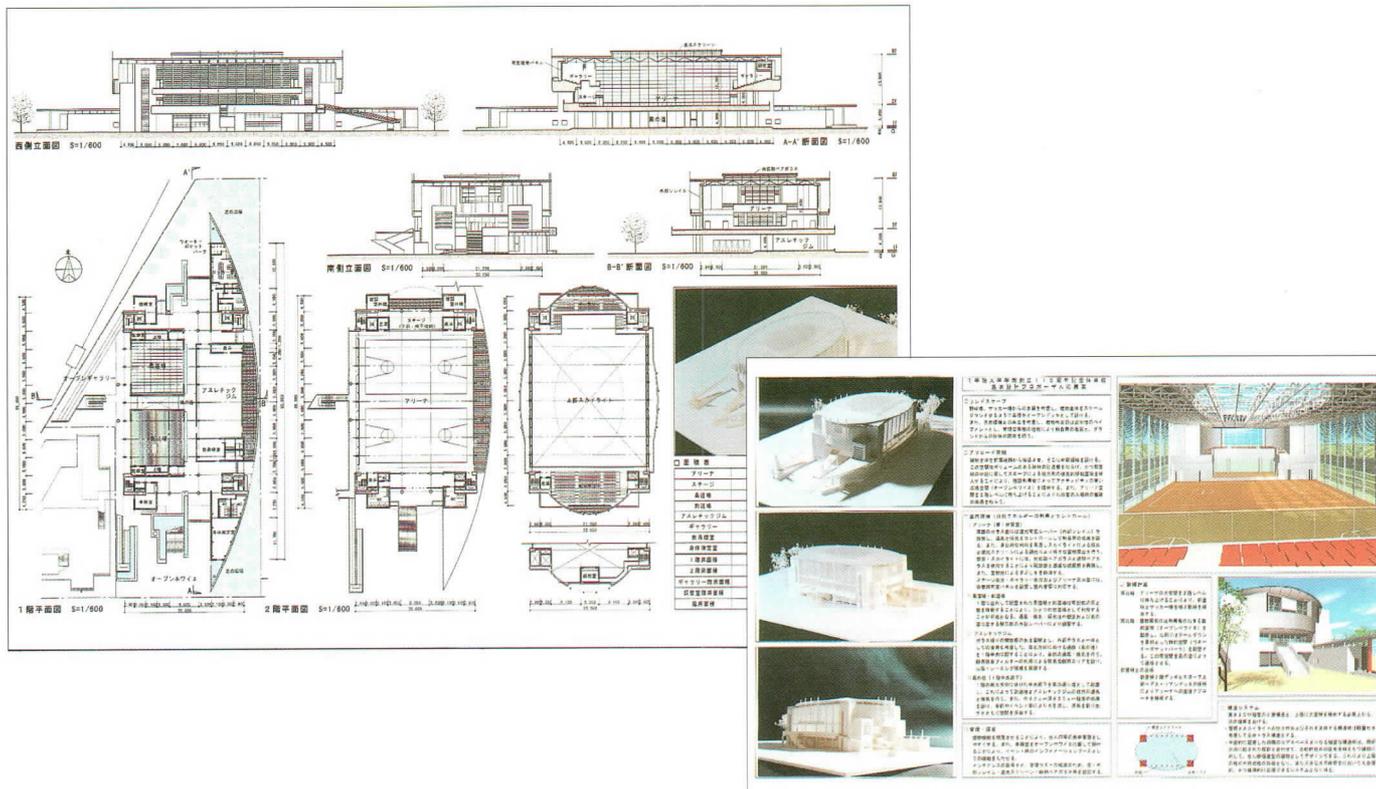
加藤隆弘案

[エル建築研究所]



小高浩義案

[一級建築士事務所 小高都市建築研究所]



「工学院大学校友会・第13回全国大会／創立100周年記念大会」が、1999年8月7日（土）、島根県松江市の「ホテル一畑」を会場にして開催された。

平野久雄・大会実行委員長をはじめとする校友会島根県支部の尽力により、“ようこそ神々のふるさと島根へ”の大会は、実に盛大、そして楽しいものになった。

参加者は、機械工学科＝72名、応用科学学科＝49名、電気工学科＝73名、建築学科＝78名、附属高等学校＝15名、専門学校＝49名の合計＝336名、この他大会役員、ご家族を含めると約500名、南は台湾、北は北海道からの参加であった。

大会は、まず第1部の「記念式典」で幕を開けた。杉山助一・校友会事業担当副会長の開会の挨拶ではじまり、物故会員への黙祷を捧げた後、南雲芳夫・校友会会長の挨拶があった。

続いて、来賓として稲田節哉・島根県知事代理商工労働部長、宮岡寿雄・松江市長、北郷薫・工学院大学理事長、長嶋秀世・工学院大学副学長、内山太・工学院大学専門学校校長、城戸一夫・工学院大学附属高校・中学校長から挨拶をいただいた。

次に、本校の理事や後援会や主任教授の来賓紹介があり、学園歌を斉唱、谷口宗彦・校友会事業部部長の閉会の挨拶で終了した。

第2部の「記念講演」は、藤岡大拙・島根県立女子短期大学学長による「古代の島根」である。まず、会場の眼下に広がる宍道湖の美しさ、特に夕日の荘厳さを、阿部知二、小泉八雲、石川淳の文学作品を引用して語った。

そして、この宍道湖の底知れぬ深さは、

出雲人そのものの感性だと説く。「出雲人は、ずっと敗北感を持ち続けてきた」とも言う。最後は“出雲弁”講座である。ズーズー弁、ポキャブラリーの豊富さ、省略の多さ……という3つの特徴を挙げ、実際に喋ってくださり、会場が爆笑の渦のなかで講演は終わった。

第3部は「アトラクション／郷土芸能：石見神楽」である。演じるのは島根県浜田市の「日脚社中」。極彩色に彩られた6匹の大蛇が、ある時は絡み、ある時は離れて描く絵模様は、まさに躍動の美の極致。その物語の行く末に、みんな固唾を吞んで見入っていた。

腹も減ってきたし、喉も乾いた。さあ、第4部「祝賀会」だ。“郷土料理と地酒のアトラクション”……校友たちが邂逅を改めて確認し、お互いの近況を語り合い、和や

かに会へは進んでいった。

午後8時、万歳三唱で閉幕したと同時に、花火の音が会場に轟いた。この日は、「松江水郷祭」の前夜祭であった。宍道湖の水面上に1,000発を超える花火が咲き乱れる一大イベントだ。良いものを見せていただきました。

それにしても大会前後日の各種ツアーの企画まで含めて、校友会島根県支部の方々には、本当にお世話になりました。奥様やお子さんまでにもご協力をいただき、誠にありがとうございました。あらためて、お礼を申し上げます。

“敗北感に打ち拉がれる”ことなく、これからも明るく、前向きに生きていって下さい。校友会島根県支部の皆さん、「だんだん！」。

(レポート＝類洲 環)



第13回校友会全国大会 島根県松江市で開催

「4大学大学院オープン スクール」開講



「4大学大学院オープンスクール」が、1999年7月27日～30日に、本校の中高層棟9階・製図室を教室にして開講された。

この「オープンスクール」は、毎年、入社してくる大学院修士生の“実務”不足に疑問を感じた日建設計と日本設計の設計実務者たちが、「実務での設計者の役割」を啓発しようと、昨年よりはじまったもの。

工学院大学、芝浦工業大学、東京電気大学、武蔵工業大学の4大学の大学院生が対象で、本年度は本校が幹事校であったために、本校で開講された。

4日間・1日4講座は、朝9時から夕方5時

までピッシリ、まさに“実務”の厳しさを映していた。

講師陣は、組織事務所という枠を超えて、建築家として現代建築の重要なシーンに関わっている方々である。そう簡単に講演など聞けない建築家たちである。その人たちが、連日の暑さにも関わらずボランティアで参加して下さった。

その貴重さ、ありがたさを知ってか知らずか、遅刻はするは、Tシャツ+半ズボン+サンダル履きで(まさか、この恰好で現場見学には行かなかったでしょうね)、「オープンスクール」が何を目的に開講されたのかを理解していない院生が若干名いて、講師の皆さん、どうもすみません。

講師の浜田明彦氏が、ご自分のアメリカでの大学院生活を振り返って、こうおっしゃっていた。「大学院とは、勉強するところ。競争するところ」。

この言葉を肝に銘じて、大学院生の皆さん、頑張ってください。21世紀の建築は、君たちに任せるぜ！ (レポート=瀬川 環)

日	講義内容	講師
1日	本講座開設の主旨。設計者の役割	小倉善明 (日建設計)
	建築設計と法規。防災計画各種開発手法	富松太基 (日本設計)
	各種開発手法(総合設計、特定街区、再開発地区計画) 一都市と建築のコラボレーション 点から線、線から面へ	大松 敦 (日建設計)
	建築デザインについて(1) 一場所と建築	浅石 優 (日本設計)
	環境問題と建築・設備計画 (地球環境と設計者の役割)	松縄 堅 (日建設計)
2日	設計管理業務と設計者の役割	山際二郎 (日建設計)
	建築デザインについて(2) 一敦厚石窟文化財保存研究・展示センターの設計を通じてー 現場見学(1) さいたまスーパーアリーナ	浜田明彦 (日建設計) 亀井忠夫 (日建設計)
3日	建築設計とコストコントロール 工事発注方式と契約	伊部 宏 (日建設計)
	性能指向型構造設計の考え方 現場見学(2) 渋谷道玄坂1丁目計画	大越俊男 (日本設計) 千鳥義典 (日本設計)
4日	ランドスケープ概論	三谷康彦 (日建設計)
	環境・建築の新しい世紀に向けて	桜井 潔 (日建設計)
	最近の建築界のテーマ 建築デザインについて(3)	倉斗道夫 (日本設計) 六角正治 (日本設計)

カリキュラム

建築学科同窓会 通常総会の開催

「第34期/建築学科同窓会通常総会」が、さる5月30日(日)、工学院大学・高層棟11階・第5会議室にて開催されました。当日の出席者は24名(役員20名、一般3名、院生1名、学生4名)でした。

議題は、①第34期事業報告・会計報告、②

第35期事業計画・予算案承認、③その他でした。

③では、「校友会全国大会・島根県大会」、「NICHE」、「体育館プロポーザル・コンペ」について、熱心に討議がなされました。

大交流懇親会 の開催

「1998年・建築学科大交流懇親会」が、平成10年12月5日(土)に、工学院大学・1階アトリウムを会場にして開催されました。

もう恒例となった各研究室が、「なるほど」と唸らせるデザイン、構造、設備を駆使した“屋台”と、「やっぱりネ」と傾かせる色彩、形態、ディテールを披露した“料理”を出店、世の中の不況が嘘のような賑わいでした。

会場のあちこちで、久しぶりに会った恩師、同窓生、研究室の先輩・後輩……の会話が行き交い、まさに大交流懇親に揺れていました。

途中、出席者全員が100円玉を出し合い、隣同士でジャンケンをしていって、最後に勝った者が全部の金額を貰えるという“100円争奪ゲーム”がありました。歓声や溜め息が交錯するなか、最後に勝ったのは学部の3年生。12,000円を手に入れました。

終幕は、これも恒例になった“屋台大賞”の発表です。参加者の得票による、“屋台”と“料理”のコンペです。今年の結果は、以下の通りでした。

第1位：谷口研究室(ドリンク)

第2位：山下研究室(おでん)

第3位：難波・嵩・吉田・遠藤研究室(モツ煮)



上：会場風景/下：谷口研究所の“屋台”

財団法人日本住宅リフォームセンターの主催による「第16回住まいのリフォームコンクール」で、小椋祥司さん（フォレスト建築研究所／1981年度建築学科大学院修了）の「時間・空間・記憶を住み継ぐ家」が建設大臣賞を受賞した。

このコンクールは「全国各地で施工された優秀なリフォーム事例の設計・施工者を表彰し、これを紹介することにより、リフォームの水準の向上および住宅リフォームの普及、促進を図ることを目的」として、毎年行われている。

建設大臣賞に輝いた小椋さんの「時間・空間・記憶を住み継ぐ家」は、岡山市内の築後90年を経た民家のリニューアルである。

—明治40年から、90年余りの時間を経てきたこの住宅に対する施主の思いを尊重して、すべてに渡って新しく手を入れるのではなく、敷地全体の骨格を再構成し、その上に長い時間を経てきたもの・記憶に残り思い出深いもの・建築的、空間的魅力をもったもの・新しい機能と空間を必要とするものなどを再配置した。

既存建物の中で残すべき古き良き“保存部分”、新しい機能や空間、設備を集約した“増築部分”、両者の中間をなす“修復・改修部分”の3つのゾーンに分け、各部分の個性を生かしながら段階性と連続性をもたせた。古い建物の保存と新しい要素の付加を計画的に行うことで、この住宅がもう一世紀、継承されることを願う、と小椋さんは語っている。

なお、偶然にも本号の「同窓生からの便り」に、主催である日本住宅リフォームセンターに勤務し、しかもこのコンクールを担当している平井裕一朗さんからの近況が寄せられている。当然、コンクールについても触れられているので、そちらも併せて読んでいただければ幸いである。

（レポート＝類洲 環）



■略歴

1953年 岡山県生まれ
 工学院大学大学院 修士課程修了
 1981年 (工学研究科 武藤章研究所)
 大成建設設計部
 武藤章研究室一級建築事務所を経て
 1984年 フォレスト建築研究所 一級建築事務所設立
 現在に至る



建設大臣賞に、小椋^{しょうじ}祥司さん
 第16回住まいのリフォームコンクール

宇田川光弘先生が「太陽エネルギーの建築的利用に関する環境工学的研究」にて、1999年・日本建築学会賞を受賞された。

「候補者は過去四半世紀にわたり、建築における太陽エネルギー利用の基礎的研究から実験および実測による実証的研究を幅広く行い、卓越した学術的能力と真摯な態度できわめて優秀な研究成果を国内外に数多く発表してきた。その業績はきわめて高く評価できる」とは、選考経過の一節である。

宇田川先生に、受賞の喜びの声を聞いた。

●このたびの「日本建築学会賞」の受賞、どうもおめでとうございます。

ありがとうございます。今までやってきた研究が認められて、非常に嬉しいです。

●受賞された論文は、どのような内容なのでしょう。

私の研究テーマは「建築環境とエネルギー」なのですが、快適な環境をできるだけ少ないエネルギー消費量で実現することは、環境問題やエネルギー資源枯渇問題の観点から、建築計画上の最重要課題なんです。建築における太陽エネルギー利用は、この問題に対するひとつの有効な方法と考えられています。

建築における太陽エネルギーの利用は、今日では、断熱や熱容量など建築の躯体の熱的特性の工夫により太陽エネルギーの有効利用を図るパッシブシステムと、太陽熱集熱器や蓄熱槽など設備システムの工夫によるアクティブシステムに分類されます。

私の今回の論文は、建築におけるパッシブシステムとアクティブシステムの両者を対象として、太陽エネルギーの有効利用を計画する上で、重要かつ基礎的な課題である日射の計算モデル、太陽熱利用熱量の計算法、建築の熱負荷法、実測による性能評価、シュミレーション手法の検証、汎用シュミレーション手法、そして自然エネルギー利用計画などについての研究成果をまと

めたものです。

●ご自邸でも“実験住宅”として、いろいろなデータを収集されたそうですね。

14年前に自宅を新築しました。2階建ての戸建て住宅で、吹抜けのあるソーラーハウスです。

屋上に12㎡程の太陽熱集熱器を設置し、太陽熱による暖房と給湯を行っています。設計に当たっては、建物の断熱を強化しました。窓には、当時はほとんど普及していなかった複層ガラスを入れてあります。さらに断熱戸や断熱カーテンを使用しているので、居間に吹抜けがあるのに、冬の暖房エネルギーはあまり多くありません。また、全電化住宅としたので、ガスは引いていません。

ソーラーハウスといっても、暖房と給湯の総てを太陽熱で賄うことはできません。通常給湯器や暖冷房用エアコンを必要に応じて併用しますので、給湯の使い勝手や暖冷房時の室内環境は一般の家と変わりません。家族の評判も良好です。

住みはじめてからずっと自宅のエネルギー消費量である電力使用量を記録しています。これによると年間のエネルギー使用量は、同規模の住宅より20%ほど少ない結果になっています。これは、太陽熱暖房・給湯と高断熱化によるものですが、この節約量は少なくはないと思っています。

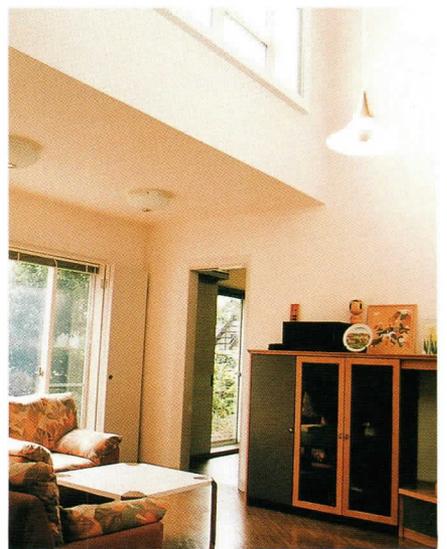
●21世紀の“環境”は、どうなるのでしょうか。

これは、なかなか難しい問題ですが、今日では地球に住む全員が環境を意識するようになったと思います。衣食住のすべてに環境問題が関わっていることも広く認識されてきました。われわれ建築に携わる者も、建築の設計、建設、運用さらに解体、廃棄の全てで、省資源、省エネルギーや環境負荷の低減などが意識されつつあります。

環境問題はあらゆる分野であらゆる人が関わる問題であることから、ひとつの理論

やひとつの技術によって全てが解決する問題ではありません。さまざまな分野での、さまざまな技術を利用していくことによって持続可能な世界を目指すことですが、すでに環境を維持するためには努力が必要であることは広く認識され、技術開発が進み社会的なシステムも整備されつつあります。

21世紀では、建築に関連する環境技術の利用や開発が、これまで以上に重要になると思います。



宇田川先生、 日本建築学会賞を受賞

麗しきフィジー

坂上みつ子



フィジーでの日々

フィジーに着いて最初の印象は、以前「窓」に掲載して頂いた事があるが、何故か「懐かしい」というものであった。「デジャヴ」ではないから、単なる「心地よさ」だったのかも知れない。そしてフィジーを去るに当たって最も名残惜しかったものは、2年間暮らした首都スバの海の景色だった。

南太平洋最大の都市 (!) スバは中野の駅前より少し小さい程度の街である。メインストリートを歩いていると10m毎に知り合いに出くわしてしまうような街であるが、そこで出会った友人はインド系や中国系を含めたフィジー人ばかりでなく、アメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人、オーストラリア人、ニュージーランド人、中国人、韓国人、ミャンマー人、タイ人、ナイジェリア人、タンザニア人と非常に国際的である。日本が技術援助をしている国の技術者がどうして他所の国の世話を焼きにきているのかと思わずにはいられないが、政治的にも安定していて、気候も温暖、恐ろしい風土病も無く、毒蛇も猛獣も凶悪犯もいない発展途上国というのはそうざらに有るものではないから、色々な国から人が集まるのだろう。特に国連ボランティアというのは、発展途上国の若手エリートにとって、収入の面からも、経歴の面からも最高のポストの一つなのである。

私はそのスバの町外れで海辺の近く、且つ国会の裏門前（帰国直前に完成したのだが）の瀟洒なテラスハウスという中々結構な環境で、アメリカの平和部隊のルームメイトと暮らしていたのだが、その日常は次のようなものだった。朝6時に起床して、ルームメイトが朝食を作り、7時半頃、私はバスで彼女は徒歩で職場に向かう。私は8時から2時間単位で授業なので、授業と授業準備の合間に学食でモーニングティーを飲みながら同僚と情報交換し、12時から2時間が昼休みなので、バスで5分の町へ出かけて、JICAのオフィスで日本からの手紙と新聞をチェックし、昼食を摂り、買い物をして職場に戻る。授業か授業準備をして4時終了、帰宅して夕食を私が作り、準備ができた頃にルームメイトがエアロビ教室経由で帰宅する。当時はまだTV放送がなかったので、日米の文化習慣について語り合いながら夕食を摂ったり、またテラスハウスの隣の住戸には一時期アメリカ人と中国人の夫婦が住んでいて、夕食に招待しあったり、夕食後にカードゲーム（といっても七ならべや大貧民）をしたりして一日が終わる。休日は日曜大工も趣味なので、シャワーや網戸や壊れた鍵を修理したりして、これが本当の生活というものだと思ったものである。

市街地を循環するバスには様々なルートがあり、朝夕、そして昼休みに幾つもの坂を下りながら、あるいは海岸沿いを走る時に必ず目にする、山と空と海の織り成す白から黒のグラデーションに溶け込んだ青と緑、そして夕日の赤と黄。見る度に表情を変えるこの景色に心を動かされない時は一度もなかった。任期も半ばに差し掛からないうちに、いずれこの景色とも別れる事になるのだと思うとひどく悲しくなったものだ。そんな時にふと気が付いたのは、この景色がフィジーの中で最も日

●坂上みつ子(さかがみ・みつこ)

- 1954年 東京に生まれる
- 1977年 工学院大学建築学科卒業
- 1979年 工学院大学大学院工学研究科修士課程修了
江黒建築設計事務所
- 1983年 エー・エス・ディー
(建築積算プログラムの開発に携わる)
- 1984年 日本電子専門学校
コンピュータ・グラフィックス科助手
- 1990年 青年海外協力隊員としてフィジー共和国・
Fiji Institute of Technology
建築土木学部へ赴任
- 1994年 日本電子専門学校
環境デザイン科科长代理
- 1999年 工学院大学大学院工学研究科
博士後期課程社会人入学建築学専攻修了
論文科目「南太平洋フィジー諸島の先住
フィジー人集落における集落形態と住居形式に
関する研究」
- 現在 日本電子専門学校
CADデザイン科コース・ディレクター
国際協力を支援する都市計画・
建築関連OVの会長
一級建築士／第二種情報処理技術者
インテリア・コーディネーター／TOEIC 755 点
Auto-CADテクニカルマネージャー



ブレバサンガ集落の集会所。ピチレグ島東部の伝統的なフィジー建築。

本的なものに近いという事であった。熱帯地方特有の派手なコントラストではなく、日本の風土によく見られる微妙なニュアンスがこの景色の中にはある。そしてさらに有彩の水墨画とでもいうか、表情の豊かさというか、日本の風土にはない一瞬一瞬の彩りが加わり、一層心を動かされるのである。

私は日本の文化の肌理の細かい肌合いが好きである。フィジーで暮らして尚更それを感じるようになった。とはいってもホームシックを意識した事は全く無かった。私が日本を発つ前に、母が「外国で生活をする日本がもっと好きになるよ」と、日頃外国かぶれの娘に言ったものだが、「私はそんなに感傷的じゃないわ」と鼻先でせせら笑ったものだった。確かに、幼少時より「メアリーポピンズ」あたりに始まって、外国(児童)文学ばかり読み漁ってきた私は、生来の好奇心と相まって、カタカナ言葉に関する雑学も普通の人よりちょっとは詳しいつもりだけれども、いわゆる外国かぶれと一緒にされると心外である。特に建築を学び初めて、文化について本気で考えるようになって、デザインの勉強の一部として始めたお茶やお華の稽古から仏教にも関心を持つようになって、自分のバックグラウンドが確かなものだと思うようになったからこそ、日本を出てみようかという気にもなり、自分の国の文化に目を向け、それに誇りを持つようにと、何処の国の学生も励ましてやりたいと思ったのである。

文化について

ところでルームメートのモーラはよく、ニュージーランド人やフランス人の友達に「アメリカなんて文化も伝統もない国に帰ったってしょうがないから国連ボランティアに応募しなさい」と度々言われていた。彼女は誰とでもすぐ友達になれたし、いつもできる限り誰にも誠実であろうとしていたし、新しい事に出会うととても感激し、真剣にそれを学ぼうとしていた。だから彼女はそういった意見も素直に受け取れたし、彼女の友達も遠慮なくそう言えたのだと思うが、彼女は「それでも私は自分の国が一番好き」だと言っていた。私はそんな彼女がとても好きだった。いつかあるパーティの席上で彼女の故郷であるボストンに行った事のある日本人としばらく話が弾んでいたが、後で私に「彼女はアメリカばかり褒めて自分の国をけなすので友達になれない」と言っていた。その日本人が本当の外国かぶれだったのかお世辞だったのかは分からない。

ヴァナキュラーアーキテクチャへの関心と、我国の近代建築史の中で出会った堀口捨巳の著作から日本建築に関心が向かい、3年のゼミでは伊藤研に入った。その時に、花嫁修業だと敬遠していた華道、茶道と日本の文化の関わりについて、伊藤ていじ先生より啓蒙を受け、当時一緒にゼミを受けていた友人とまずは華道を習う事とした。友人は草月流を、私は安達流を始めた。安達流は、花を活ける前に平面図、立面図を描く事、現代的なカリキュラム制で、実習の前にカリキュラムに沿った講義がある事、各段階の資格を取るまでの課程が明確である事が気に入って選んだのである。同流派の主宰である安達瞳子が、当時TVに出ていて好感を持っていたというのも一因であるかもしれない。年に2回、瞳子先生から直接稽古を受ける機会があったが、落ち着いた語り口がウィットに富んでいて、毎回その講義がとて



ナバラ集落。フィジーで現在唯一伝統工法の住居だけで構成されている集落。

も楽しみであった。4年掛けて、修士課程を修了する頃に教授資格を貰った。

茶道の方は、是非、小堀遠州流をやりたいと思っていたので仕事に都合の良い教室を探していたが、ある時、杉並区の広報誌に3ヶ月間無料の教室があるという案内があり、早速これに参加する事にした。幼少時より社宅住まいという事もあり、また生来の不器用さもあって、当時の私は大勢の参加者の中でも最も見込みのない生徒の一人であっただろう。通常、この種の稽古事は月3回というのが一般的であるが、この3ヶ月間は、週2回、毎週欠かさずあったので、非常に密度の高い内容だった。5月から7月までの無料教室が終了し、8月は休みなので9月から自宅へどうぞという、先生の言葉に「是非同う」という人も少なくなかったが、結局、9月になって先生の門をたたいたのは私一人であった。その時の先生が何となくがっかりされたような様子を今でも思い出す。密度が高い教室だったからこそ、他の人々は十分な知識を身につけたと思ってしまったのであろう。私も今でこそ、茶道というものは奥が深くて終わりが無いと思っているが、当時は華道と同じで4年位で免許を取るのを目標にしていた。

フィジーに行って一番役に立ったのはこれら日本の文化についての知識であった。コミュニティースクールで華道の講習をしたり、日本大使館主催の日本展で、茶道のデモンストレーションをやったりもしたが、自分の国の文化について語れない人間、つまりは文化が何であるかが分かっていない人間に、未知の文化の生活空間について語る事は不可能ではないだろうか？

私が教えていた学校では、サンドイッチ制度といって、1年間基礎的な事を学んだ後、最低1年間の実務経験を経てさらに1年間、より専門的な事を学ぶというカリキュラムになっていた。つまりはインターン制度である。私が在職した当時は、見習いの学生の受入先よりも学生の数の方が多かったので、とりあえず進級して、実務経験を満たしてから卒業証書を貰うというケースが全校的に少なくなかった。私が担当したのは、この専門コースのカリキュラムの中の設計論や設計演習、卒業制作であった。各年、6名前後の学生が建築学科に在籍していたが、その中の半数が実務経験無しで進級した学生で、半数が何年も前に基礎コースを終えた学生であった。

ルシアナは10年前にイギリス人の教師から基礎コースを学んだ後、ずっと公共事業省の建築課で働いてきて、社会人として私のクラスに参加して来たのだった。彼女は二人の女の子の母親でもあるが、最初の年に卒業設計（地方の病院計画）に取り組んでいる最中に夫との離婚騒動が持ち上がり、それを完成させる事ができなかった。結局2年間、私の生徒であり、優秀なアシスタントでもあった。公用語が英語とはいえ、専門用語の分からない同級生達にいつもフィジー語で通訳をしてくれたのである。私を伝統的なフィジー人の集落に初めて連れて行ってくれたのも彼女であった。最初の年に住宅の設計課題を出した時、その彼女が持って来たプランにはロンドンの集合住宅に見られるような、あるいは風除け室のような、小さな玄関があった。それはフィジーの気候風土からも、私が訪ねた友人達のどの家からもかけ離れたプランであった。私はその前の学期で西洋建築史をやっていたので、彼女は私がそういうプランを喜ぶと思ったようであった。私はシラバスに沿って、深く考えずに授業をしてしまった事間違いに気付き、フィジー独自の教材の必要性を感じたが、その当時はフィジーの文化については何も知らなかったもので、その後は

同窓生を 訪ねて
麗しきフィジー
坂上みつ子



1996年のフィジー現地調査—ナンダリバツ集落の
地元有力者の家で訪問儀礼（セブセブ）を終えて、
左端が萩原正三教授（当時）

もっばら日本について話をした。

ルシアナの協力を得て、この教材を作成しようというのが、そもそも「フィジーの研究」に取り組むために私が大学院に入り直した動機であった。しかし、大学院に戻った1年目の5月にフィジーにルシアナを訪ねた私を迎えたのは彼女の訃報であった。もともと先天性な心臓疾患を抱えていた彼女は、2児を残して前年の12月に他界していたのである。私は彼女のためにも「フィジーの研究」を続けなければと思っている。

極楽とんぼ

萩原先生にはよく「極楽とんぼ」と言われたが、「情報」を求めてあっちこちをふらふら飛んで、「情報」の集まる場所に止まって、目玉をぐるぐる回して「情報」をキャッチしようとしているという雰囲気が、私のキャラクターをよく表していると思う。先日、あるTVの番組で好奇心の強い性格と心配性の性格はDNAの特定の部分に関わっていると言っていたが、私の好奇心の強さと臆病さはDNAによるものなのだろう。設計事務所からソフトハウスに転職したり、青年海外協力隊に入った、普通の人から見ればかなり思い切った行動に出る事があるが（本人はそう思っていない）、私はどちらかといえば行動的な方ではない。「極楽とんぼ」を自認する過程には、三つの大きな出会いが関わっている。その第一が「建築学」との出会いである。昔の子供は色々なものになりたがったように思うが、私もマレーネ・ディートリッヒのようなスパイやシャーロック・ホームズのような探偵も含めて、長大なリストを持っていたが、大学進学に当って現実的な選択肢として残ったのがインリッヒ・シュリーマンのような考古学者か当時のTVドラマで見た建築家であった。結局一方に絞り切れなかった私は、まず建築家になってお金を貯めてから考古学者になろうとムシのいい事を考えたのだが、「建築学」については、現在、私が教えている専門学校の入学したての学生よりも知らなかったような気がする。入学してすぐに儲かる仕事でないのが判ったと同時に、「建築学」が思ったよりすばらしい学問である事に気付いた。実は、この時点で考古学への興味はほとんど完璧に「建築学」に取って代わられたのである。そのきっかけは、入学後のかなり最初の頃に「建築学は人間の営みすべてに関わるものさし」と言うような説明を授業で聞いた事による。全方位型好奇心の私にとってこれはまさに「我が意を得たり」だった。

第二はバックミンスター・フラアの「宇宙船地球号」との出会いである。「宇宙船地球号」という表現は、今ではTV番組のタイトルにもなっているが、SFファンでもあった私は、単純に書名に惹かれてこの本を手にとったのだが、地球環境が一つの宇宙船内の環境と同じであるという考えをととても新鮮に感じたものである。そして当時は理解できない内容も少なくなかったが、「全システムの運動の状態であり、つまり、システムのばらばらな部分、あるいは、システムの部分の寄せ集めをそれだけで観察した運動の状態からは推測する事ができない状態」であるシナジーが重要だと理解した。簡単に言えば、「木を見て森を見る」という事であろう。森を見るためにできるだけ数多くの木を見る必要性をフラアが裏付けてくれたのである。

そして最後が「色即是空、空即是色」である。先に述べたような経緯から、日本の文



国会裏門前のテラスハウス。左から2番目が私の住んでいた住戸。

化に関心を抱くようになって、特に「禅語」の簡潔さ、奥行きの高さには強く惹かれるものがある。中でも、虚と実が不分明であるという教えは、マクベスの「Fair is Foul, and Foul is Fair (良いは悪いで、悪いは良い)」というせりふにも通じるものがあり、これこそが絶対的な真実ではないかと考えている。近年では、ライアル・ワトソンがその著書「ロミオ・エラー (ちくま文庫)」で、生と死の不分明さを論じているが、私にとっては、「物事の不分明さ」は思考の過程で偏りを検証する拠り所となっている。

環境・伝統・コンピュータ

以上の出会いを経て、私は「とんぼの目玉」を磨いて来たわけだが、とはいえ全く当ても無くふらふらしている訳ではない。この20年ほどの私のテーマには先に述べた「伝統」の他に「環境」と「コンピュータ」がある。この3者の関係については、1990年に日刊建設工業新聞の「都市環境デザインへの提言」という連載に投稿し、その後この連載は単行本になっているが、こちらも機会があれば読んで頂きたい。

「環境」については卒業設計の「杉並清掃工場」、修士設計の「山形県西川町の環境教育施設」以来、現在の職場である専門学校での「環境デザイン科」の学科運営まで、私の主たる関心事ではある。しかし、「宇宙船地球号」を読んでいた頃から、人類というものは地球にとっての癌細胞のように思えてならず、通勤の中央線から朝夕眺める建物群は、地球を覆う痛々しいかさぶたに見えてしまう。私は本来建築を作る側に留まりたかったのだが、現在、教える立場にいるのは、この内面的矛盾が解決できなかったせいでもある。

「コンピュータ」はSFファンだったのが主な理由で是非とも学びたいと思っていたが、学部3年の時に電算機の授業を半年間受講した後、必修の設計の授業とぶつかり受講できなくなってしまった。だから建築の世界でCADが紹介されだすと、いてもたってもいられなくなって、設計事務所を辞めて「コンピュータ」の世界に飛込んでしまったのだ。しかし、当時も今も「コンピュータ」はツール以上のものであるとは思っていない。ツールとしては近年ようやく妥当なものになってきたとは言えるが、未だに問題の多い、でき損ないのツールだと思っている。とはいえ電子メールにしる、文書作成にしる、このツール無しでは夜も日も明けぬ有り様ではある。

学ぶという事

「建築」を造るという事は人類にとっての偉大な文化であると考えているが、我が国において、その偉大な文化に携わる人間が置かれている労働環境は劣悪であると言わざるをえない。人間性を高める時間的余裕も経済的余裕も無い。で、結局私は設計事務所に4年といわれなかった訳で、さらには、無料もしくは逆にお金を貰って学ぶという図々しさを身につけたのである。

私は元々人見知りかひどくて自己紹介すら苦手なので、学生時代は取れる単位は何でも取ったにも関わらず、「教職」の単位には見向きもしなかったのは、「人前で話す職業」などは問題外だったからである。大学院の1年の時に初めて学会で発表を

同窓生を 訪ねて
麗しきフィジー
坂上みつ子



スバ市公会堂での日本大使館主催の日本展——茶道と華道のデモンストレーション。

して、10分の発表予定を5分で話し終えてしまって、時間を持って余してどぎまぎしたのがいまだに忘れられない。15年前に現在の専門学校の求人に応募したのだが、「コンピュータの実習の助手」だから応募したのであって、60人もの学生を前にして、2ヶ月独学しただけのFORTRANの講義をする事になるとは思いもよらなかった。その当時は1コマ90分だったが、予め用意してあった内容はいつも30分もしないうちに話し終えてしまう。学生が理解できる速さで話すなどという余裕はないし、予定していない内容を質問されたら全く答えられないという状態だった。「建築という分野でのコンピュータ」の必要性を教えるために居るという自負を支えに、建築に関する質問には答えられるが、コンピュータは専門ではないので基本的な事しか分からないから一緒に勉強して行こうという姿勢で新しい生活が始まったのである。

しかし、それでもなんとか切り抜けてこられたのは、荻原研で大学院生として2年間、「農村環境改善センター」を卒論テーマとする数名の学部学生を預けられた経験のお陰だったと思う。特に、2年目の学生の平均年齢は、私とほとんど同じだったから、何を生意気などと思う学生もいたのだろう、かなり鍛えられたという記憶がある。今でも「人」と接する時間が長いとストレスを感じるので、試験期間とか夏休みとか「授業」をしないでよい期間はとてもホッとする。そういう期間が定期的にあるのでこれまで続けてこられたのだと思う。

一方で、建物や図面やコンピュータを相手にする仕事に比べて、「人」を相手にする仕事は実に面白いとも思う。「人」それぞれ反応が違うからで、陳腐な言い回しになるが、学生それぞれの「瑞々しい感性」をできる限りすなおに伸ばせるような手伝いができればいいと思って今の仕事をしている。就職指導の折りに、私が「極楽とんぼ的生き方」を薦めるものだから、反対に「人生の厳しさ」について学生に諭されたりもする。何年も前に卒業した学生が、ふらりと訪ねてきて、私の「口グセ」なんかを覚えていてくれたりすると妙に嬉しくて、この仕事が辞められないでいるのだが、年々、いやいや教室に来ているという学生が増えているような気がする。専門学校は出席を重視するので、教室に座っているのだが、教室で行われている事には全く関心が無いというか、最初から分からないものだと決め付けているのである。先日「私だって学校なんか嫌いだった」と高校のベテラン教員がTVで断言しているのを見てなるほどと思ったが、自分の嫌いな物を人に無理矢理押し付ける人間は最低だと思うし、そういう教員に教えられた学生は本当に不幸だと思う。「学ぶ」という事は本当に楽しい事はずだ。

私にこの流れを変えるだけの名案があるわけではないが、せめて私が出会った学生たちには、2年間なるべく楽しく過ごしてもらって、将来その2年間を振り返って、「そう言えば『学ぶ事は楽しいぞ』って言ってたな、ちょっとやってみるかな」と思ってもらえれば、それが私にできる最善の事だと思う。

「背に腹は変えられない」的な仕事をしながら、職人氣質の徒弟制度的思想を後輩に押し付ける人を見かける事がある。「建築」は「文化」である。「建築」を造る人にはありとあらゆる事を学んで、人格を高めてもらいたい。そしてこういう右肩下がり時代だからこそ、若い人たちが学ぶ機会を作る事に、諸先輩には手を貸してやって欲しいと切に願わざるを得ない。多くの人が「極楽とんぼ」の目で世の中を見るようになると、少しは世の名も変わるのではないかと思うのだが……。

同窓生を 訪ねて
麗しきフィジー
坂上みつ子

日本近代建築史の重要な場面に立ち会った 山本鑑之進

(やまもとかんのしん)

読者の皆様は「藤木工務店」という名を聞いたことがあるだろうか。大阪に本社を持ち、「顧客第一」を社是とする中堅ゼネコンである。「年史」によれば、「藤木工務店は大正9年11月23日に発足した。当時、山本鑑之進工務店に勤務していた藤木正一が、山本鑑之進氏の事業を引き継ぐ形で創業したのである」とある。

この藤木工務店の“起業の祖”である山本鑑之進こそが、本校建築学科の第1回卒業生に他ならないのであった。

■工手学校：各専門技師の補助たるべき工手を養成する学校

山本鑑之進——1864年(元治元年)1月15日、江戸は本郷丸山の備後・阿部藩の江戸下屋敷に生まれる。鑑之進の父・晴次は阿部藩の江戸留守居役という要職にあり、廢藩置県の後には阿部家の家令として新しい事業を推進していった。

養蚕と茶の栽培、足軽長屋を活用した貸家業を展開する一方で、邸内の一角 360坪を無償で提供して「誠之小学校」の創設に協力したりした。そして1884年(明治17年)、生糸と茶業に変わる事業として、邸内を区画整理し、本格的な貸家・貸地業への転換を図った。現在も穏やかな町並みを残す東京都文京区西片町であり、第二次大戦が終わるまで阿部家の所有地であった。同町への入居者は阿部家により厳選された。住人の中には、伊藤忠太、関野貞、武田五一、田辺淳吉など、日本の近代建築史に大きな足跡を残す建築家たちもいた。もっとも、みんな鑑之進と同年代であり、彼らが西方町に住む頃には、鑑之進は大阪に出ていた。

父の進める小学校や町づくりの建設過程を毎日、見ていた鑑之進の心に“建築”が芽生えたのは自然といえるのかもしれない。1887年(明治20年)、鑑之進は、創立されたばかりの「工手学校」の「造家学科」に入学する。「工学院大学」の「建築学科」の前身である。

「工業の隆盛を謀るには、學術の応用極めて緊要なり。(中略)而るに今我国の有様にては、技術者養成の學術甚だ尠く、一二官立学校に於ては、高尚なる技師を養成するに充分なるも、各専門技師の補助たるべき工手を養成する学校に至りては、亦一校の設置あるなし。故に工業家に於ては、補助工手の供給なきに苦しみ、勢ひ學術応用の思想に乏しき者を以て、彼の高尚なる技師の補助と為さざる得ず。為に技師は使役に不便を感じるのみならず、結局、工業家の不利益を來すものにて、即ち我国工業進歩の一大障碍を与ふるものと云ふべし。是れ余輩の最も遺憾とする所なり。(後略)」——「工手学校設立趣意書」である。

つまり、工手学校は、短期間に現場で役に立つ知識と技術を身につけさせることを狙った、またすでに工場などで働く勤労青少年をも生徒として受け入れる実戦力養成の学校だったのである。

鑑之進は、「各専門技師の補助たるべき工手を養成する」この学校で、彼の人生を大きな飛躍に導く師に出会うのである。——辰野金吾である。

辰野の人となりを、いまさら紹介しては故人にも読者にも失礼かと思われるが、実は本校の創立者・渡辺洪基が学校創立の計画を最初に諮ったのが辰野であった。辰野もかねがね「技量熟練なる監督員の養成」と「事業に誠実なる請負業者の育成」



「時事新報」(明治21年)掲載の入学生募集広告

日本近代建築史の重要な場面に立ち会った

山本鑑之進



日本銀行本店



日本銀行付属舎（南分館）

は説いていたところなので大いに賛同した。そして、創立委員のひとりとして名を連ねるばかりか、開校後は建築学科教務主任、会計主任、校長代理、監事などを歴任した。当時、辰野は、自らが第1回卒業生として巣立った工部大学校の教授を務めていた。その要職に着きつつである。

歴史は「文字通り私費を投じ、手弁当で、自らも必要とする監督者の育成」に尽力したと伝える。

■日本で最初にエレベータを使用したオフィスビル

1889年（明治22年）7月7日、工手学校の第1回の卒業式が行なわれた。造家学科からは19名が“現場”に出ていった。

山本鑑之進は、翌年の1月、新設された日本銀行建築部に就職する。部署は製図場である。日給30銭の雇用で、設計図の浄写が仕事であった。その設計図こそは、辰野金吾の不朽の名作にて、明治建築の傑作といわれる「日本銀行本店」であった。鑑之進は、10カ月後の1890年（明治23年）10月、工事着工と同時に工事係（督役）に任命される。そして、工程や発注などの関係から工事が4工区に分けられ、その一工区の工事主人に抜擢されたのであった。

明治建築界のドンたる辰野に異を唱えるものはいなかったが、この起用にだけは陰口が叩かれた。「かかる大建築を若年の建築工学士あるいは工手学校卒業生でよく出来るものか……」。

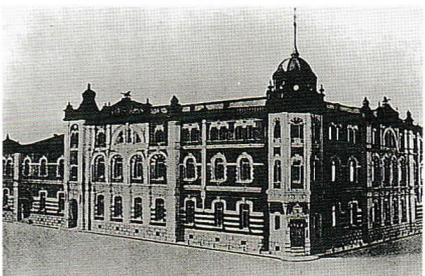
しかし、1896年（明治29年）、その杞憂を吹き飛ばすかのように「日銀本店」は見事にバロックに身を包んだ威容を現したのだった。鑑之進の現場監督第一号の建築である。実は、竣工の前年の末に「免建築落成ニ付」、工事関係者は全員、解任されている。鑑之進も、退職金 360円を頂戴していた。が、明治29年の4月に、辰野と鑑之進は日銀建築部に再採用され、「付属舎」（南分館／竣工：1898年）の建設に携わる。その時の鑑之進の身分は建築技手で、月給は35円であった。ところが、同年の11月には、本当に退職することになった。以下の出来事から推察するに、辰野の指示があったのかもしれない。

折しも「日本生命大阪旧館」の設計が辰野にもち込まれた。しかし、辰野は工部大学校の教授であり、日本銀行建築部の技師として奉職中であった。このために、辰野は自分は設計指導役に回り、高弟であり同行の設計嘱託であった関野貞を設計者として専任させ、かつ顧問として、これも高弟であり日本生命の副社長・片岡直温の養子である片岡安を当てた。

関野貞は、鑑之進の父親が管理していた西片町の住人である。彼は後に、日本と東洋の建築史のパイオニアの道を拓いていくので、「日生大阪旧館」は「奈良県物産陳列所」（1902年）とともに、関野貞の建築家としての貴重な“足跡”といえる。一方の片岡安は、その家柄故か、関西建築界の大立者で、後に恩師・辰野金吾とパートナーを組み、大阪に設計事務所を開く。

さて、鑑之進である。日本生命に残る1894年（明治27年）12月12日の日誌には「本社新築工事ニ付（山本鑑之進ヲ）主任ニ採用ノ事ニ決ス」とある。鑑之進の運命の大阪第一歩である。

「日生大阪旧館」は、1902年（明治35年）に竣工する。煉瓦造、地上3階、本格的なルネッサンス様式であった。当時の大阪で様式建築が珍しかったばかりか、日本で最初のエレベータ使用のオフィスビルとして話題を呼んだ。



日本生命大阪旧館

山本鑑之進

■日本近代建築史を彩る作品群

鑑之進は、「日生大阪旧館」の工事が終了しても大阪に留まった。辰野の次なる“指令”は、辰野が顧問をする住友本店臨時建築部への奉職であった。「日生大阪旧館」竣工の年の5月である。翌年に作成された「名簿」によると、技師長：野口孫一、技師：日高胖の次に、技手：山本鑑之進が続いている。ここで鑑之進がどんな建築を担当したかは詳らかにしないが、この住友本店臨時建設部こそは関西建築界の支柱にて、その後、長谷部鋭吉や竹腰健造に引き継がれ、かの日建設計に発展していくのである。

辰野が、住友本店臨時建築部の顧問を降りるといふ。「自分にとっても、良い機会かもしれない」——鑑之進も退職した。そして、ついに「山本鑑之進工務店」の看板を掲げるのである。1911年（明治44年）12月吉日、大阪市北区相生町。時に鑑之進、47歳であった。

山本鑑之進工務店の第一作は「日本生命京都支店」である。同社に保存されている1912年（明治45年）2月28日付の『京都支店新築工事入札結果回議文書（資料）』によれば、同社の片岡直温社長が、入札した3社のうち、鑑之進について「本社建築の際、監督者として誠実に勤務し、技術経験共に相当に有之候間、特に同人に申付度候」と、強く推薦していたことが判る。「日生大阪旧館」での手腕が評価されたのである。

同じく京都市。中京区三条富小路に「旧不動貯金銀行」（現・協和銀行）京都三条支店がある。設計は日本建築設計であるが、長い間、施工者は不明のままだった。しかし、所有者の変更によるリニューアル工事の際に棟札を発見。そこには「請負人山本鑑之進」と記されてあった。

北陸は福井県。「二十五銀行玉前支店」が煉瓦造の落ち着いた佇まいを見せている。1917年（大正6年）に行なわれた上棟式の棟札が残されており、頭取：酒井仲誠、設計者：吉木久吉、請負人：山本鑑之進とある。

山本鑑之進、畢生の作品がある。「京都・都ホテル」である。

都ホテルは、1890年（明治23年）に創業した吉水園に源を発しているが、関西の財界人たちが発起人となって、1915年（大正4年）に都ホテルとして新発足したのだった。社長に選任されたのは片岡直治である。独立後の鑑之進の処女作である「日本生命京都支店」に鑑之進を強く推してくれた日本生命の社長である。蛇足を加えれば、片岡は後に政界入りして大蔵大臣となる。

当時、京都では大正天皇即位御大典のため、京都駅前から御所に至る道路の拡張をはじめとする市内の整備が急ピッチで進められていた。都ホテルも、御大典に参列する高官や参観者を収容する施設の整備に取り組んだ。まずは「葵殿」と呼ぶ主食堂・大宴会場である。入母屋造、日本瓦葺き。床面積は430m²。内部は総檜で、天井は折上げ格天井である。

典雅にして豪壮、日本の伝統を血で受け継ぎ、西洋を理性で理解した者のみに可能な造形である。

■次のミレニアムに足を踏み入れる前に……

「君たちは長野宇平治を知っているか」と問いかけたのは長谷川堯であった。

長野宇平治——“和唱洋随”を高らかに謳って憚らなかったコテコテの古典主義建築家である。銀行建築に傑作を多く残すが、そのひとつに「日本興業銀行大阪支店」がある。鉄筋コンクリート・石・煉瓦造、地上3階・地下1階で、装飾がちりばめら



日本生命京都支店



二十五銀行玉前支店



日本興業銀行大阪支店

日本近代建築史の重要な場面に立ち会った

山本鑑之進



都ホテル全景と旧築館

れて古典主義者・長野の面目躍如たる建築であった。残念ながら1961年(昭和36年)の新社屋建設の際に取り壊されてしまったが、玄関ポーチの脇に、旧館の柱頭飾りが保存された。その銘板に刻まれている名は、山本鑑之進。—そして、この工事をもって鑑之進は現役を引退するのであった。

鑑之進を業界から退かせた理由は何だったのだろうか。1919年(大正8年)の暮れ、上京する車中で、軽い脳溢血に見舞われた。幸いにも後遺症はなかったが、帰阪しても何故か気力が回復しなかった。無理もなかった。鑑之進が脳溢血で倒れたその年の3月25日、辰野金吾が世を去っていた。鑑之進の最大の理解者であり、指導者であった。

「わが身も、ここまで」と悟ったに違いない。「引退することを、あいつにだけは早く知らせておかなければならない」。

あいつ……社員のうちでもっとも信頼していた藤木正一である。鑑之進は藤木を呼び、廃業の意を伝えた。そして、片岡事務所への転職を薦めた。が、藤木は他へ就職する意志はなく、これを機に独立したいと申し出た。意外な言葉であった。しかし、鑑之進は喜び、安堵した。「彼になら後事を託せる。全面的なバックアップも惜しみない」。

藤木は独立するに当たり、「山本鑑之進工務店」の名を残すことにこだわったが、これには鑑之進が潔しとしなかった。代わりに、山本家の家紋である“三つ巴”を社章として使用することを許した。ここに「藤木工務店」が創業する。大正9年11月23日である。

藤木工務店の第一作は、長野宇平治の設計による「日本銀行岡山支店」である。竣工は1924年(大正13年)。鑑之進の支援と信用がもたらしたしごとであったのは言うまでもない。だが、その竣工を見届けるかのように、同年11月30日、山本鑑之進はみまかった。享年61歳であった。

次のミレニアムが、そこまできている。その新世紀に対応する教育のあり方を問うのは当然である。しかし、原点を見直し、基礎を磐石なものにする絶好の機会でもある。「工手の養成」という本校の原点。その原点を忠実に守りつつ、日本の近代建築史の重要な場面に立ち会った山本鑑之進—。

OB・OG諸氏、そして現役学生・大学院生諸君、本校の原点を改めて確認し、21世紀に大きく飛翔して下さい。

(レポート=類洲 環)



日本興業銀行大阪市店・柱頭飾

参考文献

- 『工学院大学学園百年史』(1993年/学校法人工学院大学)
- 『職人たちの西洋建築』(初田亨/1997年/講談社選書メチエ)
- 『東京・年の明治』(初田亨/1994年/ちくま学芸文庫)
- 『藤木工務店五十年の歩み』(1970年/藤木工務店)
- 『藤木工務店70年史』(1992年/藤木工務店)
- 『源流をたずねて/建築と人の100年』(1990年/藤木工務店)
- 『歴史に学ぶ/建築と人間の織り成す歴史と文化』(1997年/藤木工務店)
- 『日本の建築家』(新建築/1981年12月臨時増刊)
- 『建築人物群像』(土崎紀子・沢良子/1995年/住まいの図書館出版局)

住宅・都市整備公団での30年



櫻井志朗

(1969年度建築学科建築学コース卒業／住宅・都市整備公団
神奈川地域支社神奈川中部開発事務所所長)

小生、大学卒業後、日本住宅公団に入り、早いもので30年が経過しました。公団名も現在、住宅・都市整備公団で、今秋には都市基盤整備公団となり、事業目的も名称のとおり変わってきております。

この間、多摩ニュータウンの開発、首都圏域および九州・福岡圏域での住宅地開発、「横浜みなとみらい21」や「さいたま新都心」などの特定再開発事業に携わってきました。また、この10年間は、関係機関に出向することが多く、「横浜みなとみらい21」で街づくり協議会の運営、「地域振興整備公団」では福島・会津若松・長岡・沼津・鳥取などの中心市街地の活性化に、「新都市サービス」では住都公団の開発した住宅地のセンター地区における商業施設の立地調査や施設管理などに携わりました。

現在は、今年の7月より神奈川県の中郡市および伊勢原市において、それぞれ住宅地開発（2地区合計106ha）を担当している神奈川中部開発事務所に所属しております。

担当した事業のうち、よく知られている事業について触れますと、多摩ニュータウンは、1966年（昭和41年）に事業に着手してなお現在も事業中です。小生が赴任したときには、ちょうど第一期の入居がありましたが、まだ京王相模原線・小田急多摩線が未開通でその後の入居が中断された時期でした。その当時、マスタープランが作成され、多摩市域から八王子市域・稲城市域へと開発が進みましたが、開発が長期に渡ったため、時代を反映して多様な開発形態の見本市のようになっております。

そして、初期入居の地域はもうリニューアルの時期にきており、当時想定されていた住み替えが少なく居住者の高齢化が進んでおります。また、センター計画においても、商業環境の激変から、立地上の問題が生じ、特に近隣センターにおいて商業施設の成立が厳しくなっており、さらに新しい動きとしては、大規模なパワーセンターやアウトレットがサブセンターの隣接地に実現しようとしております。



同・窓・生・か・ら・の・便・り

今、話題に上がることが多い「みなとみらい21地区」を担当したのは、横浜博覧会の準備が始まった時期で、公団は会場整備を受託し工事を実施するとともに、建設省などと一緒にはパビリオンを出展するなど博覧会一色でした。博覧会が開催された平成元年には、「横浜みなとみらい21」に出向し、街づくり協議会の事務局として博覧会開催時にも工事を進めていた「パシフィコ横浜」や博覧会終了後着手する「ランドマークタワー」「横浜銀行本店」などの計画調整、事業コンペで実現した「クイーンズ・スクエア」では審査会事務局として、また、超高層建築物により10数万世帯に影響が予想される電波障害の対策方法・対策事業の実施、電波障害対策協議会の設立準備を担当するなど、貴重な経験ができました。「横浜みなとみらい21地区」は、1965年（昭和40年）に横浜市の6大事業の一つとして19万人分の就業の場を創造するため企画され、現在は業務核都市として東京からの業務分散の受け皿としても位置付けられて1983年（昭和58年）より事業開始されています。当初は2000年に完成予定で進められましたが、経済状況の影響から10年は遅れそうです。

冒頭にも触れましたが、都市基盤整備公団法が本年6月16日に公布され、今秋（10月予定）にも設立されます。1955年（昭和30年）7月に設立された住宅公団が、住宅不足に対する大量供給を目指したのに対し、1981年（昭和56年）10月に設立された住都公団は性能や居住性を考慮した大量の住宅を供給するとともに、商業・業務施設を主体とした事業（横浜みなとみらい21や西新宿のアイランドタワーなど）である特定再開発事業が新たな業務に加わり、新公団では名称から住宅が消え、原則として分譲住宅から撤退し、既成市街地の機能更新を公共団体や民間事業者との協力の下に進めることを打ち出し、昨年度より先取りの形で大都市部での虫食い用地を取得し、土地の流動化と地区整備の推進を民間事業者と協力しながら進めています。

なお、現在、小生が担当している2地区も、新公団の目指す事業のモデル的な側面を要しております。従来は、大規模空地地に自然環境などの優れた住宅地を形成することが主体でしたが、今後は既成市街地における地域の整備や大規模公共施設との一体的整備を想定しております。

平塚市で展開している約69haの地区は、中に800棟強の建物があり平安時代にも溯れる農村集落と、スプロールによる新興住宅が混在しており、事業費を軽減するためにできるだけ建物を動かさないように土地利用計画をたて、従来型のスッキリした道路パターンとは違い極力既存道路を生かしても、事業費の6割程度が建物移転の補償費となっております。



もう一方の、伊勢原市で展開している約38haの地区は、中央を国道246号が横断しそれと交差する形で長手方向の中央を第2東名自動車道が高架で縦断する計画と河川改修が行われることになっており、基幹交通施設等用地の確保と住環境の保護が課題になっております。

新公団の発足を間近に控えて、今後の事業展開の試金石になるよう新たな職場で、さまざまな問題に取り組もうと考えております。

女性の立場から 建築業務に携わって(家庭との両立)



花木 花

(1969年度建築学科卒業／花木設計室主宰)

現代における女性の社会進出は目覚ましく、私が大学を卒業し、はじめて設計事務所に就職したころでさえ、女性だからということで、仕事で不自由を感じたことなどなかった。ただ、男性社会ともいえる建築業務の中で働くことで、他の女性がたぶん味わえないだろう経験を、幾度となくしたことは確かである。

勤めて3年目にはじめて田端の4階建てマンションを任された。私の初仕事である。当時、周辺はまだ2階建ての木造住宅ばかりで、日影を心配した近隣住民の反対にあった。その説明会に何度となく足を運んだが、親ほども年齢が上の人たちが一同に会しての質疑応答である。経験が浅く、しかも女性であることが私を不安にした。実際、新前の私には、その雰囲気たるや戦々恐々たるものがあったが、何とか納得していただき、建てられる運びとなった。

この時だけは、さすがに「自分が男性であったら」と思った。後にも先にも唯一の時である。四苦八苦した末に、自分自身に「建築を続けていく以上、避けては通れないことなのだ。やるしかないな」と、いきいきと、出かけていったのを今でも覚えている。このことは後に、自分の中で大きな自信になった。

また、笑われるような失敗も数多くある。監理に出かけた雨上がりの現場で、2階の木造の梁で足を滑らせ、梁に宙吊りになった。気付いた棟梁が下で受け止めてくれて事なきを得たが、私としては冷や汗ものであった……などなど。

こんな経験を何度も重ねていくうちに、女性といえども、度胸だけはついていったようだ。

建築学科に進む女子が多い昨今、後輩のために何かということで、「家庭との両立」というテーマをいただいた。家庭をもち、主婦としての役割を担いながらも、建築の仕事にはさして支障なくやってこれたと思う。特に、住宅設計では主婦の立場であることが、それを体験している者の設計ということで、かえって仕事によく活かされてきたと実感している。

同・窓・生・か・ら・の・便・り

だが、あらためて振り返ってみると、一時期ではあるが、他の職種について人より家族に与えた負担は大きかったかもしれない。私の一生懸命さだけで家族は自然に後押ししてくれたが、その理解なくしては、とてもやってこれなかったと思う。

15年ほど前から、私は自宅から車で5分ほどの駅前に事務所をもったが、家から近いということもあり、仕事の追い込み時の数日は、夕食の支度にいったん帰宅し、また慌てて事務所に戻って、深夜2時、3時まで仕事をするのが常になっていた。こんな忙しい思いをしながらも仕事を続けてきたのは、設計という作業が自分にとって何より好きだったからかもしれない。その上、思い通りの建物ができ上がり、施主の喜ぶ顔が見られた時などは、家庭ではなかなか味わうことのできない充実した嬉しさがある。

私にとって、この“充実した嬉しさ”を感じられるということは、ただ単に自分だけの仕事上での喜びだけにとどまらず、家庭生活も円滑に楽しいものにする大きな要因となってきたと思う。一家の主婦が毎日を、張りをもって明るく過ごすこと、このことの家族に与える意味は大きいと、私は自分勝手にそう思ってきた。そんなふうに私が生きていくことが、私に協力してくれてくれた家族への、私からのお返しのような気がしたのだ。……限られた時間でする家事は、仕事からの解放感もあり、けっこう楽しく、私にとって仕事と家庭は、互いにリフレッシュできるための良い場となっている。

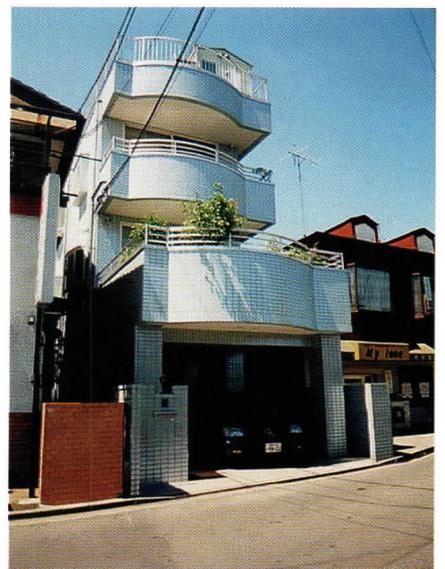
施主との何回かの打合せを重ね、基本設計やデザインがほぼ決まると、私はできるだけ一緒に、使用する材料や機器を実際に見に行くことにしている。カタログでは解らない質感や色彩、そして音の具合を事前に知ってもらうためだが、私にとっても、1年1年、目まぐるしく変わる商品を把握するよい機会でもある。1軒の住宅を有するのに、ほとんどの人がローンを組み、長い間その支払いを負っていく。後から生じる不便さに、その都度、補修していく余裕などないだろう。だから、細かな点まで考慮しても、し過ぎることはないと思う。また、新築時の機能性や美しさをいかに長く保持していくか、メンテナンスの上でも材質選びは重要で、このことも設計を任された私の責任だと感じている。

建築設計に携わって、30年の時が過ぎた。建築デザインを志し、悩みもがきながらもある種の創造の快感から抜けられず、同じ作業を幾度も繰り返してきたような気がする。これから先も、相も変わらず同じことをし続けていくだろう。

だが、建築はその中で人間が生活し活動している、いわば命を預かる器である。阪神大震災は、そのことを如実に私たちに教えてくれた。もう一度原点に戻って、構造の安全性、施工の確実さなどを見つめ直す時かもしれない。私は、このことを心して、これからも建築設計に従事していこうと思う。



H邸



K邸

ここ10年のこと



最勝寺靖彦

(1969年度建築学科卒業/TERA歴史景観研究室)

気ままに生きていたいと思ってきた。

定職もなく、それなりに気ままであった。43歳になった時、ふと、そんな人生に欲が出た。

原稿を書いてみよう。

書いてみたら、これは面白いということで、連載になった。小さな雑誌だが、隔月ごとに書き続けていたら、枠から外れた考え方するのも、ひとりぐらいは必要ではないかということで、この雑誌の編集委員にさせられた。

そして、講演を頼まれるようになった。

20年前から、人が見向きもしなかった風水や陰陽五行に興味をもっていたので、講演で話していたら、今なぜかそれが受けるようである。母校の校友会で喋らせていただいたのは今年のことである。

ひょうひょうと生きていたいと思ってきたが、悩む時もある。

49歳の時、頭の薄くなった姿を鏡に映しながら、暑い夏が過ぎ、厳しい冬に向かう秋のように、寂しげに過去を振り返り、一体何をして来たのだらうかと思った。若き日に、芸術論を語り、哲学を口にして大きな野望も、今や先の山の頂が見えて来て、自分の力の限界の輪郭が見えてきた。

友人の何人かは、この年頃、大病を患った。人生、一度や二度は訪れる秋に似た淋しさである。

その頃、仲間と旅に出た。ブータンである。この国の人々は、49歳にひとつ足した年頃になると、家督を子どもに譲り、隠居し、死を迎える準備を始める。

人びとは死ぬと、生とも死ともいえない中陰の世界(バルト)を49日間、彷徨い続ける。その後、冥界の王シンジ・チョギャルの裁きで、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天道のいずれかの世界に生まれ変わる。輪廻転生の世界である。

次の生まれ変わる世界は、今生の行為で決まるらしい。それ故、50歳を過ぎると、人びとは功德を積み、ひたすら経をあげる。経文が書かれた旗ダルシンを棚引きかせ、風で経を読ませ、朝夕、香を炊き、煙に託して神々へのメッセージを送った。こうした人びとの神々への願いは絵になった。

風に揺らぐ無数の旗や、朝もやのように、民家をおおう香の煙は、人びとの読経の響きと重なり合って、宗教の風景をつくった。

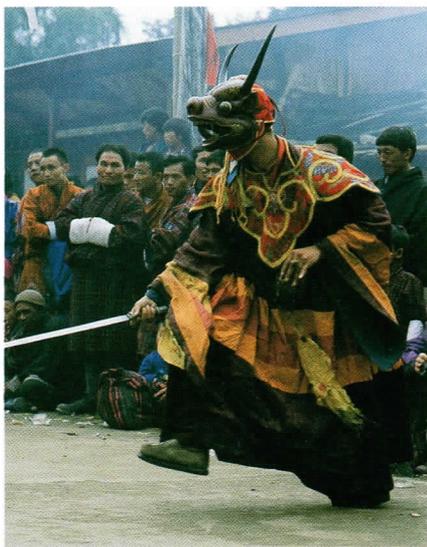
私も、私の風景をつくりたいと思った。隠居や道楽の美学ではない。ブータンで知った明日へに向かう力強い表現をしたい。

そんな折、同級生のA子から手紙が届いた。

大学に入って、次の準備を始めたと書いてある。子どもたちが去った庭に、自分の花を咲かせたいとも書いてあった。

49歳から、4年の歳月が流れた。

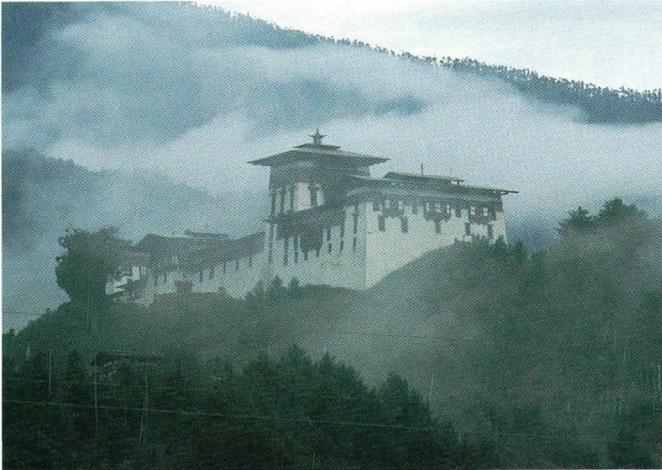
今、私は徳島県の吉野川の河原にいる。夕方になると、水面に小さなさざ波が起り、魚のうろこのように、夕陽で水面が赤く染まる。日本のふるさとにいる。



(上) ブータンの祭

(下) ブータンのダルシン

同・窓・生・か・ら・の・便・り



ブータン・ジャカルゾン（城）



うだつの町並

この近くに、古い町並みがある。ひっそりとして情緒のある町並みは、過疎で病んでいる。町の人々は、200年前の1軒の古民家に新しい命を吹き込み、町並み全体をも眠りから醒めて欲しいと願っている。その手伝いをしているのである。

人生の輪廻転生ではなく、民家の輪廻転生に立ち会っているわけである。

学生時代、伊藤ていじ先生のもとで倉敷の町並み調査をしていた。また、ふたたび民家を手掛け、私の学生時代が始まろうとしている。はたして、ブータンの人びとのように、私なりの風景がつかれるであろうか。庭に、自分の花が咲かせられるであろうか。

43歳の転機から10年がたった今、新しい生き方が始まるのではないかと、内心、浮き浮きしているのである。

経験した海外の建設工事／ CM業務



中村隆彦

(1968年度建築学科設備工学コース卒業／フジタ建築本部設備部長)

私の社会人としての経験は31年間ほどですが、その中で海外業務関連の期間が24年間ほど、関連した国が23カ国、地域的には中南米がその大半でしたが、北米、アジアオセアニアも6年間ほどあり、中近東クエートにも4年間常駐した経験もあります。その中で、特に印象深い事柄“CM業務に従事したこと”を紹介したいと思います。

CM業務とは

一般的には日本国内での建設業務は“工事請負契約”に基づき、工事のみを契約

することが多いのですが、最近、欧米、特にアメリカでは“CM業務契約”という形態が登場するようになりました。

CM業務とは、Construction Management の頭文字を取ったものです。定義はいろいろありますが、私の会社での解釈は下記のようなものです。

プロジェクトの企画、設計、施工のすべてに関し、事業主の利益を最大化するために行われる業務である。

サービスの内容としてはConstructin Manager が、事業主の企画立案から参加するとともに、設計事務所、工事請負業者、材料機器メーカーなど、建設に関連するあらゆる要素を機能的に組織し、合理的に運営していくためのマネジメント業務である。

すなわち、経験、知識を生かし、事業主に代わって建設工事の企画基本構想、土地の選定、基本計画、基本設計、実施設計、入札、契約、建設工事、完成、引き渡しまでを管理・運営する業務契約です。したがって、従来の建設業務と比べ、より川上での建設工事への参加となります。

私の経験は

私が関与したプロジェクトは「車の開発技術研究センター」でした。

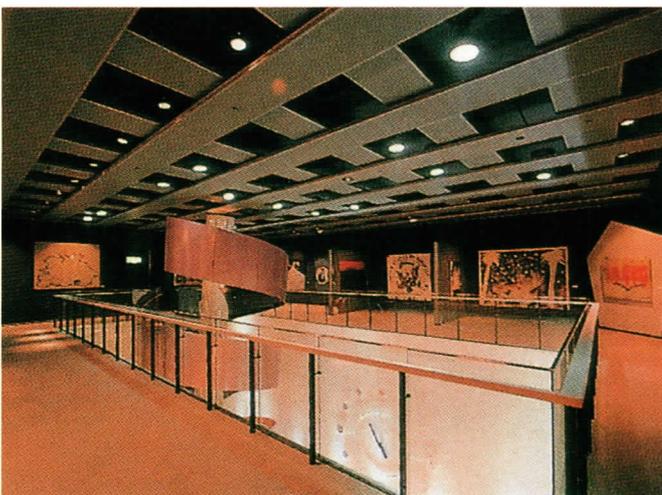
建設場所は、アメリカ合衆国ミシガン州で依頼された業務がスタートした時点はすでに土地の選定が完了し、着工する間際とのことでしたが、当然、必要で肝心な設計図書がありませんでした。

施主サイドに問い合わせたところ、設計契約は2年前に完了したのですが、設計図書がなかなかできあがってこないとのこと、したがって工事着工ができないという問題発生時点でした。

早速、設計事務所に状況調査したところ、設計に必要な生産関連の情報が設計事務所に受領されておらないとのこと。施主に問い合わせたところ、「すでに何度となく提出済み」とのこと、話が噛み合いません。

提出済み資料を調べたところ、日本で何時も使用されている生産ラインの概略資料そのまま赤インクで英語が書き込まれており、その英語も日本語を忠実に翻訳したものでした。即ち、たくさんの情報が一枚の図面に雑多に書き込まれたものでした。原因は「そのような設計指示では、現地の設計事務所が設計できない」ということでした。

私の会社でも何度かCM業務の契約をしておりますが、設計指示は設計事務所に設計内容を提示する設計指示書（Owner's Requirement といっています）をまずつくりま



ババアニューギニアにてコンサルタントとの打ち合わせ中

同・窓・生・か・ら・の・便・り

この設計指示書は、設計を開始して終了するまでのすべての情報を記述しており、設計契約書の添付資料でもあり、記載事項以外は追加工事となります。設計工程上、遅れて指示を出しても問題ない事項は遅れて指示を出すこともあります。また、日本では技術者（われわれゼネコンも、施主サイドも）はいつでも同じメンバーで仕事をし、共通認識を共有している経験が多いため、不十分な説明ですべてを説明しなくても意志が伝わってしまいます。これらは一種の“閉鎖社会”と海外から指摘される現象かもしれません。

また、指示している内容は“その機能を要求しているのか、その形状を要求しているのか”も不明確でした。いずれにしても、指示していないのに等しい状況が長く続いたわけです。

われわれのCM作業は、まず提出済み資料を目的、用途、内容別に分類し、不足説明部分を拾い出し、施主技術部門に追加要求し、準備ができた部分ごと、項目ごとに設計事務所に説明を実施し、また足りない情報は手配し提示する作業を項目リストに沿ってひとつひとつ実行しました。

また、この作業の中でたいへん勉強になったのは“何のためにこれが必要なのか？”ということです。請負工事に従事している場合、請負工事に必要ないことは知らされないことが多いのですが、CM業務は全般事項の把握、判断が必要ですので、すべてを知ることが必要ですし、できるわけです。いわゆる施主サイドの立場で物事の情報入手および判断ができますし、予算管理も全体を視野に入れて、不要なもの、余計なものの評価、判断ができました。

設計段階が完了し、工事が開始すれば設計図書が十分であれば工事は順調に進みますが、施主の技術陣は日本と同じで工事期間中、連続的に要求事項を出し続けるので、その都度、設計変更、工事変更手続き（追加工事の認定、工期への反映、追加工事金額の決定など）を行いました。

工事が開始しているいろいろありましたが、CM業務に参画してから比較的順調に進行し、結果的に施主にはよい評価を受けました。

最後に

これからを含め、海外経験で得た要点は下記の2点です。

1. いかに自分の意志を正確に相手に伝えるか!!

設計図書も意志伝達の手段のひとつだと思っておりますが、日本では先に述べた通り閉鎖社会性が強く、“一を聞いて十を知る”が人間関係で重要という概念がありますが、他の国の人たちとか多民族国家の人たちにはこの考えはほとんど理解されません。相手の立場にたって、相手の風俗、習慣、歴史、民族、宗教を考慮しないと、意志の伝達は完全にはできません。

機能が大事か、形態が大事かを明確にすることも重要でしょう。

2. お互いの理解は“何を基盤にしたら良いか”!!

技術には普遍性があり、機能、要求性能が同じであれば、グローバル化されても大きな差異は起こりませんが、手法、工法などはその国の歴史、経済的背景、民族、技術移入経路などにより、それらが複雑に影響し、異なっている場合の相互理解はかなりエネルギーが必要となります。

私の経験では、このような場合“何のために”“目的は何か”という原点に立ち戻ることを、いつも念頭において調整業務を行いました。その時、一番役に立ち、また基盤となったのは“計画言論”“物理学”“化学”といった大学での基礎的な講義の内容でした。

21世紀はリフォームの時代



平井裕一郎

(1984年度建築学科卒業／財団法人日本住宅リフォームセンター)

現在、建設省所管の日本住宅リフォームセンターで働いております。当センターは、住宅リフォームの普及・促進を目的として設立され、活動している団体です。この場をお借りして、主な事業をご紹介します。

1. 増改築相談員制度(人材育成事業)

住宅リフォームを行う事業者としては、現在でも大工・工務店が多いのではないのでしょうか。10年以上の実務経験を持つ大工・工務店の方を対象に、増改築相談員の研修を受けていただき、登録された方が増改築相談員になれます。現在、全国に約12,000人おります。

2. マンションリフォームマネジャー制度(人材育成事業)

平成元～3年頃、昭和40年代～50年代前半に建てられた多くのマンションが、リフォーム時期を迎えました。しかし、マンションには、区分所有法や管理規約といった決まりや壁を隔てて別の住戸があるといった特長があり、住戸内(専有部分)のリフォームにおいて、多くのトラブルや問題が発生しました。

例えば、ベランダをサンルームに改造したり、外壁に無断でエアコン用スリーブを開けたり、カーペットからフローリング張り(当時は質の良いマンション用のもはなかった)に替えて騒音問題になったり、裁判にまでなることもありました。このようなトラブルを防ぐべく、居住者、工事業者、管理組合の間に立って指導・助言などをするマンションリフォームマネジャー制度ができました。マンションリフォームマネジャーになるには、毎年10月に実施される試験に合格して登録しなければなりません。現在、全国に約5,500人おります。



同・窓・生・か・ら・の・便・り

3. 住まいのリフォームコンクールの実施

今年で16回目を迎える歴史あるコンクールです。リフォームの設計者および施工者のレベルアップを目的として行っており、住宅リフォーム事例を応募いただくコンクールです。建設大臣賞は10月の住宅月間オープニング記念式典で表彰されます。入賞作品はパネル化されて、各地で開催される住宅フェアなどで展示され、リフォームしたい消費者の参考となります。

4. 住まいのリフォームフェアの実施

毎年、渋谷のNHK放送センター前広場にて、リフォームしたいという消費者の相談を受けたり、住宅部品の展示などを行う「住まいのリフォームフェア」を開催しています。NHKも21世紀にBSデジタル放送、プラズマテレビ（壁掛けテレビ）、インターネットなどの通信設備によるマルチメディアを既存住宅に取り込み普及させるためには、住宅リフォームが不可欠であるとのことで、ご協力をいただいています。

5. リフォーム事業者情報サービス(リフォネット)

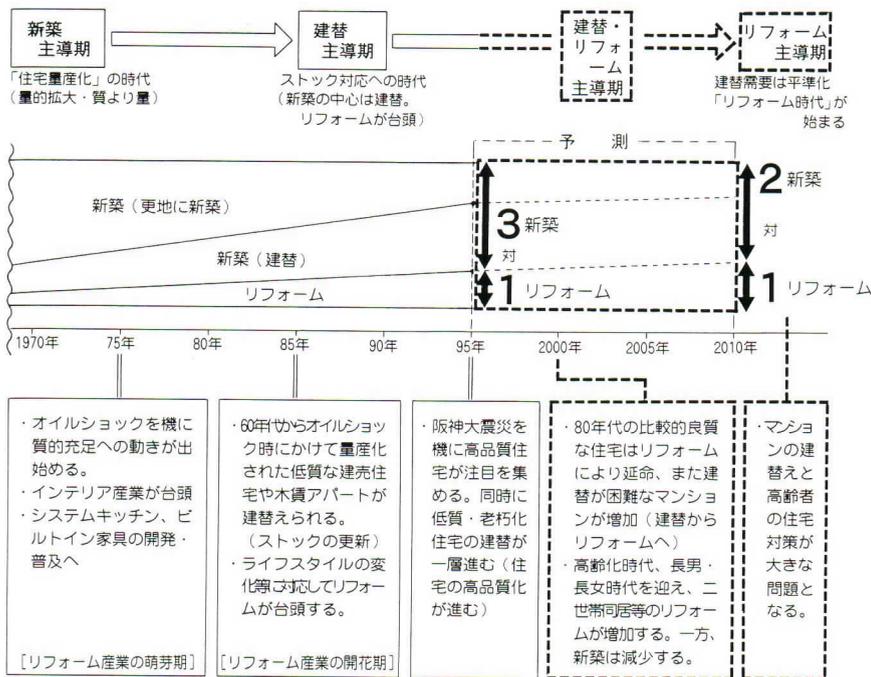
当センターのアンケート調査で消費者に「リフォームをしたくても、どこに相談したらよいか判らない」といった悩みがあることがわかりました。そこでFax.情報サービスで登録されているリフォーム業者の情報が引き出せるサービスが、「リフォーム事業者情報サービス」（愛称：リフォネット）です。

情報を引き出す費用は電話料のみです。アクセスしたい方は、お手元のFax.から受話器を取って、03-3261-4684へダイヤルすると操作メッセージが流れますので、それに従ってFax.を操作して下さい。現在、1,500社以上、2,000店以上が登録されています。平成12年からはインターネットでのサービスも始まります。業者の登録受付は毎年9月です。

6. その他の事業

その他に、海外のリフォーム事情を視察する「リフォーム視察」をヨーロッパ、アメリカ・カナダへ視察に行っております。また、リフォームの技術開発および市

住宅市場の需要内容の変化と将来予測の概略図



「2010年にはリフォームの市場規模は10兆円を優に超え、金額で見れば新築とリフォームの市場規模の割合は、現在（平成8年で新築24兆円、広義のリフォーム約9兆円）のおおむね3対1から2対1に縮まり、2010年ごろから本格的な「リフォーム時代」が到来する」と予測している。

場などリフォームに関する各種調査研究や一般消費者、またはリフォーム事業者向けのセミナーや書籍の出版も行っております。

この他にもリフォームに関する情報を発信をしていますので、興味のある方はアクセスしてみてください。

ホームページ：<http://www.hrcj.or.jp>

Fax.情報サービス：03-3261-4684

現在、住宅は年間130万戸ほど建設されています。一方、建て替えは地球環境問題や良質の住宅供給がされていることを考えると、これまでのようなスクラップアンドビルドを繰り返すことはできないでしょう。よって住宅ストックが増え、その住宅をリフォームして長く使い続ける必要が出てきます。「21世紀はリフォームの時代」と言われる理由です。図のとおり2010年には住宅リフォーム市場は10兆円との予測もあります。

将来性ある市場をめぐる新規参入の業者も多く、よってトラブルも発生しています。昨年、欠陥リフォームについてテレビ、新聞などでも多く採り上げられました。21世紀を目前にして、住宅リフォームが注目を浴びている現在、この仕事を通して社会に少しでも貢献できるよう頑張っていきたいと思います。

「学ぶ」ということ



中島美果

(1995年度建築学科卒業/埼玉県吉川市役所建築課)

私は4年前に大学を卒業し、現在は市役所の職員として働いています。

大学では構造を専攻し、広沢雅也先生の研究室で、先生その他大勢の皆さんに大変お世話になりました。

学生時代を振り返ってみると、授業や製図は出題されたものをただこなすという感じで、ましてや試験ともなると前日に徹夜で必死に詰め込み、試験が終わってしまうとあとは何も覚えていないというようなことをくり返していました。唯一、友人をたくさんつくれたことが今も役立っていると思います。

就職を決める頃は、氷河期と騒がれていましたがなんとか決まり、民間の企業で1年間働いた後、個人的な理由から退職し、今の職場に勤めています。

市役所での仕事の内容は、公共施設の新築工事や改修工事について設計、積算、発注から現場の監理、そして完成までひととおり携わらせていただいています。今は仕事の流れをやっとつかんできたというところです。私の所属している部所はそれほど大勢いるわけではないので、設計ひとつにしても、意匠・構造・設備といった専門分野ごとの担当者はいなく、全て自分で調べたり、聞いたりして進めていかないと仕事が止まってしまいます。(もちろん、そんな大きな仕事ではないのです)

同・窓・生・か・ら・の・便・り

が) このような時、いつも私がしなければいけないことは「学ぶ」ことではないかと感じます。

「学ぶ」ということで私は去年、一級建築士を受験しました。実際はそんなことないのですが、なんとなく学生のころから女性というだけでハンデがあるような気がしていて、資格がなければ現場でも相手にされないのではないかと思います、絶対に受験資格ができたらずに受けようと心に決めていました。

そして、この時ばかりは前日に詰め込む、という学生の手段が通用しないのは明確であったので、コツコツやるしかないと自分にいい聞かせて勉強をしていました。勉強をしていくうちに、何故か学校で習った気はするのですが、ちっとも覚えていないことが多く、まるではじめて建築を学んでいるような感じでした。自分は一体この4年間何をしていたんだろうと落ち込みましたが、気持ちを切り替えて、一から学ぶ思いで、何でも素直に吸収することができたと思います。

私は、資格をとるための学校へ通っていたのですが、授業がある日は仕事が終わってすぐに駆けつけ、学校がない日はもちろん自宅勉強をするという、まさにこの時期、私の人生の中で一番勉強をしたのではないかと思います。そしてまた、いろいろなことを覚えていく毎日が大変充実していたとも思います。

そのかいあってか(?) 無事に試験に合格することができました。もちろん、まわりの人たちの支えと協力があつたからこそだと思っています。これから受験しようとしている方たちも仕事で忙しいと思いますが、頑張ってください。

さて、一級を手に入れたからといって何が変わるわけでもなく、いまだに設計や積算に悩まされています。やはり資格があっても経験にはかなわないなあと思います。また、試験が終わって間もないというのに、覚えたことをどんどん忘れていく自分に驚き、勉強にはゴールなどなく、日々積み重ねていかなければいけないものだ実感しています。

話は変わりますが、私は仕事上、さまざまな会社の方々とお会いする機会があります。そこでいつも感じるのは、工学院大学を卒業した先輩方があちこちにおいて、数多く活躍しているということです。このことは私にとってとても心強いことです。不況といわれ、大変な時代ですが、私も決して“ぬるま湯”につかることなく、自分にできることや「学ぶ」ことをしっかりしていきたいと思っています。そしてこれからどこかで一緒に仕事をさせていただくことがあるかもしれませんが、その際には、どうかご指導のほどよろしくお願ひいたします。



小学校の耐震改修・大規模改修の配筋検査



ブレース搬入の立会検査

建築学科の新しい風に聞く

後藤 治

(建築都市デザイン学科助教授)

久田嘉章

歴史的建造物を じっくりみる習慣を

後藤 治 (建築都市デザイン学科助教授)



この4月から新しく発足した建築都市デザイン学科の助教授として工学院大学でお世話になることになりました。

それまでは、文化庁文化財保護部建造物課という国の機関で働いていました。文化庁では、文化財として特定されていない歴史的建造物を調査し、関係者と調整をはかった上で国宝・重要文化財などの文化財に特定する仕事をおもに担当していました。また、その手続きにかかわることとして、歴史的建造物の保存・活用のための仕組みづくりや他省庁等の関係機関との調整といった仕事も手がけていました。

文化庁時代のいちばんの思い出は、文化財登録制度の導入(平成8年10月に文化財保護法の一部を改正して施行)に担当者の一人として関わることができたことです。文化財登録制度は、一定の価値を持つ歴史的建造物を国の保持する台帳に登録しそれを公表することによって、その保存・活用を促進しようとする制度です。欧米ではそれが普及し、多種多様な幅広い歴史的建造物の継承へと結び付いているのに対して、日本ではそれがなく歴史的建造物が次々に失われていることから、その導入の必要性が建築学会等から叫ばれていました。この制度導入によって、これから日本でも歴史的建造物の保存・活用が進むことを期待しています。

私の研究テーマは、もともと寺院建築を中心とする日本の

建築史でしたが、以前の仕事との関係もあって、歴史的建造物の保存・活用・修復に関わる制度や仕組みについての研究も進めています。これからはそれに加えて、歴史的建造物の保存・活用・修復を実際の現場に近いところで手がけていくと同時に、それによって発生する諸問題等についてもあわせて研究していきたいと考えています。

学生には、歴史的建造物の保存・活用・修復を行っていくために必要なことのいくつかを、これまでの経験を通して伝えることができると考えています。そのひとつを具体的にあげると、建築家としての才能、良心や幅広い知識等の基本的な素養を身に付けることに加え、制度や仕組みといったものの果たす役割を知るのではないかと思います。最近の学生の多くは、歴史的建造物に興味はもっていても、それが次々に失われていく日本の現状を、生物が死を迎えるような自然の現象だと考える傾向があるようです。この考え方は、誤りだと思います。現在おきている現象のなかには、ある制度や仕組みに誘導されているものがあり、その制度や仕組みが生まれた背景には、ある時代の社会的要請が必ず存在するというものを知ってもらえればと思います。

また、学生達に望みたいのは、歴史的建造物をできる限り時間をかけてじっくりみる習慣をつけることです。このためには、歴史的建造物を単に断片的なデザインの要素としてみたり、過去のものとして決めつけてみるのではなく、現在そして将来に役立つ資産としてみる視点をもつことが重要なのではないかと思います。

■後藤 治 (ごとう おさむ)

1960年 東京生まれ

1984年 東京大学工学部建築学科卒業

1988年 同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退

文化庁文化財保護部建造物課 勤務

博士(工学)、1級建築士

著 書 『四国の住まい』(INAX出版)

『建物の見方・しらべ方』(ぎょうせい、共編著)

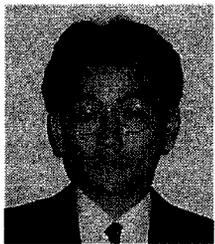
『文化協力における民族と国家』(NIRA、共著)

『木造建築事典』(学芸出版社、共著) 他。

建築学科の 新しい風に聞く

研究テーマと教員としての 抱負、最近の学生の印象

久田嘉章



研究テーマ

本学に来る前は、主に不整形地盤の地震動特性をコンピュータシミュレーションで調べていました。最近、東海地震を想定した設計用入力地震動の作成や、神戸での地震動解析、構造物の地震応答解析、港区の地震防災解析、関東平野のリアルタイム地震防災システムの開発なども行っています。

地震動研究は、これまで地震学や建築構造の中ではあまり日の当たる分野ではなかったのですが、阪神淡路大震災を契機として、国の政策が地震予知から地震防災へ移行したことや、活断層を考慮した地震動作成の必要性が高まっていること、性能設計への移行などで、最近はとみに重要度が増していると感じています。

共同研究も、科学技術庁防災科学技術研究所、東京大学地震研究所などの国立研究所や、清水建設大崎研究所、大成建設技術研究所、横河建築設計事務所などの民間企業、カーネギーメロン大学土木環境学科など海外の研究所、とさまざまな機関と行っています。

教員としての抱負

大学の教員として、まずは基礎研究の最前線に立ち、地震学などの最先端の情報を地震工学に応用し、より合理的な地震防災と耐震設計法を提案しつづけたいと思います。一方、教育に関しては、本学に来て以来、学生を通して教育させてもらっていると言うのが正直なところです。

教育で重要視したいのは、基礎をきっちりと学んだ上で、自分の長所を生かせる専門分野を見つけて欲しい、ということです。社会に出る前に、自信の持てる武器をひとつは身に

つけて欲しいと思います。これをどのように実践するか試行錯誤なのですが、建築学科では学部3年生から建築セミナーを通して研究室に配属させ、個々の学生の個性に触れることができます。

そこで私のセミナーでは一つの試みとして、学生が主体的に興味ある研究テーマをまとめ、人前で発表・議論する機会を設けています。私や学生同士、大学院生などに揉まれながら、長所を最大限に生かして欲しいと思います。学生のなかには建築よりもコンピュータや情報通信に精通し、本学で行っている地震観測データをリアルタイムにホームページに公開するというユニークなシステムを構築し、そのままプロとして活躍している者もいます。教育に携わる人間として、教え子が社会で大いに活躍することが、やはりもっとも嬉しいことです。

最近の学生の印象

近年、マスコミでもよく取り上げられていますように、少子化や理工離れなどによって大学に入りやすくなり、学力レベル低下が言われています。偏差値の是非は別として、本学の学生も基礎学力が低下しているのは紛れも無い事実だと思います。個々の学生は非常に性格の良い子が多いのですが、学生の全体の印象は、残念ながら没個性でおとなしい、と思います。総じて言うと女子学生の方が元気で、質問も遠慮無くしますし、毎年の成績上位者も女子学生で占められています。男子学生は家族やさまざまな社会的圧力で、あまりに良い子になるように鋳型にはまってしまっているのでしょうか？ 年功序列も崩れ、一流会社も平気で潰れる昨今です。「良い子」よりも、チャレンジ精神旺盛な「したかたで、たくましい子」になってほしい、と思っています。

私自身まだまだ未熟ですので、今後、OB・OGの方々にはいろいろとご教授いただくこともあるかと思っています。今後とも宜しくお願いいたします。

1961年に東京で生まれ育ちました。1984年に早稲田大学建築学科を卒業し、大学院に進み、1989年から3年間助手をし、1991年には工学博士を授与されました。その後、1992年から3年間、米国の南カルフォルニア大学地球科学科でポストドクターの研究助手として働きました。1995年から縁あって本学のお世話になっています。現在、38歳で独身です。先日、研究室の卒業生第1号の結婚式に招待されましたが、「まさか教え子に先を越されるとは……」と嬉しいやら悲しいやら……。

●難波蓮太郎プロフィール

専門分野：建築材料施工

生年：1933年

出身大学：早稲田大学第一理工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了、ベルギー国立リエージュ大学、Ph.D.

本校奉職：1958年

最近の著書：『外壁仕上げの損傷事例原因と対策』（1996年／日本建築仕上学会／技術書院）、『外装構法耐震マニュアル中層ビル用・低層住宅用』（共著／1998年／建設省住宅局建築指導課・日本建築主事会監監修／日本建築センター）、『JASS15（左官工事）』（共著／1998年／日本建築学会／丸善）



●ひとこと

1957年の夏期材料実験で、当時、学部4年生であった南迫先生の学年を指導し、翌1958年4月に本学の助手に就任以来、43年を経過しました。爾来、建築物の外壁仕上げ、特にセメントモルタル塗りの耐久性の向上、補修・改修技術の確立に努力してまいりました。

この数年は、左官材料の究極の対象として、新しい漆喰の開発に取り組んでいます。調湿、脱臭、仕上面のテクスチャのバラエティなど、クロス張りに代表される乾式材料にはないメリットがあります。

1999年9月に、平凡社の「別冊太陽27／骨董を楽しむ」に、私の新築の漆喰壁が古い家具、建具とともに紹介されました。定年後も、左官との付き合いをますます深めたいと願っています。

教科書・ レオロジー・OB会

田中 斉

(1979年卒業／飛鳥建設・技術研究所／本学非常勤講師)

難波先生のゼミに入ったのは、3年生の後期からである。その年の前期に先生の「建築材料」の講義を受けて、難波研のゼミを選んだ。ちょうど私の受けた講義の時から、『新建築ハンドブック・材料—設計の基礎』（1976年／彰国社）がで

きあがって、教科書として先生が最初に使用した講義であった。先生の計らいで特別価格であったが、正誤表が添付されている記念すべき初版である。同書の最新版も購入しているが、正誤表付きの初版は今でも書棚に飾ってある。

この教科書には強い印象を受けた。従来の建築材料の本とは異なる編集方針でまとめられたものであった。それまでの教科書といえば、材料の分類を中心とした、またBE別の特徴を記述しているものであったが、先生の書かれたこの本は違っていた。材料の分子結合や組成・構造が説明され、そうしたキャラクターと材料の特性や性能を関連づけており、「材料科学」というものを平易に説明しているもので、私の知る範囲ではこのような観点の建築材料の本は、その後1～2冊程度しかまだ出版されていないはずである。

当時の難波研のゼミは、旧校舎地下の材料実験室の奥で行われた。現在の高層校舎になる前の9階建て校舎の地下1階に研究室があり、決して綺麗ではなく、セメントの粉体などが舞い、生活環境としても良くないが、集中してゼミを受けたり、たむろするにはうってつけの場所であった。

先生は酒豪で、取り巻く学生もさらに強かったが、卒論・ゼミ指導はもとよりさまざまな人生の教訓を我々の心に残された。その頃、先生は左官用モルタルのワーカビリティについて精

力的に研究を行っていて、その後一連の研究によって日本建築仕上学会から論文賞を受賞されている。

当時のゼミでは、「君たち、レオロジーはいかん。あれを始めるて泥沼だ。レオロジーはやらない方がいい」とよく私たちに話された。今になって思えば、モルタルのレオロジーでかなり苦勞されていたのかもしれない。私の知る限りでも相当数の学生が、先生とこのレオロジーに関しての卒論や修論をやって苦しんでいる。私の場合は、その難波先生の言葉にしたがって、現在に至ってもレオロジーにはまだ手を染めていない。

私の卒業後も、先生は左官モルタルのレオロジーに関して一貫したテーマで研究を継続され、多くの論文を報告・発表されており、その姿勢は研究者として羨ましい限りである。他にも、先生は「外装仕上材料のムーブメント・剥離」や「木造住宅のアラミドコープによる耐震補強工法」などのテーマも精力的に取り組まれた。それらの成果を日本建築学や無機マテリアル学会の論文発表会や数々の講習会などで報告されている。

別に「ナニワ研OB会」が盛会である。私もその役員をしているが、先生を囲んで毎年5月の総会、情報交流会や親睦会など各種会合や名簿発行など行っている。先生を中心としたOBの新たなネットワークが形成されており、先生が本校を退官されてもこの集団は継続して活動するはずである。

来春、難波蓮太郎先生がご定年で退職されます。永い間、本校のために尽くされたことに感謝を捧げるとともに、いつまでもお元気であられることをお祈り申し上げます。またお逢いできる日を、楽しみにしています。

また逢う日まで

建／築／学／科／だ／よ／り

校友会のホームページアドレス <http://www.mesh.ne.jp/kkyoyukai/>

●本部役員宛メールアドレス kkoyukai@mx5.mesh.ne.jp

●事務局宛メールアドレス koyujimu@mx6.mesh.ne.jp

建築学科同窓会のホームページもありますので、皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

※このページは工学院大学建築学科が NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです

〈ご無沙汰しています-1〉 第1部の近況

初田 亨 (工学院大学建築学科教授／主任教授)



■大学の建築学科創立45年を迎えました。

工学院大学の建築学科が、4年制の大学として出発したのは1955年(昭和30)4月からで、今年でちょうど45年をむかえます。それ以前に短期大学の時代、工手学校の時代があり、それらを発展させることで、現在の工学院大学建築学科はつくられてきました。工手学校が創立したのは1887年(明治20)で、その時から数えれば110年以上になります。建築を体系だって教えた日本の学校としては、工手学校は東京大学に次いで2番目に古い歴史をもつわけです。4年生の大学になってからでも、すでに45年です。45歳といえば人間では壮年の年代で、知識も豊富な、血気盛んな働き盛りであります。体力もまだ多少無理がききます。このような血気盛んな年齢を反映してか、ここ数年間、建築学科では積極的に変革を進めています。昨年度の望月大介主任教授などの尽力で、懸案となっていた新学科の設立もはたし、4月には「建築都市デザイン学科」を発足させました。なお、建築都市デザイン学科の主任教授には渡邊定夫教授がなされました。

新学科のスタートは順調で、学生定員を昨年の「都市建築デザインコース」の時から10名減らして70名で発足したにもかかわらず、受験生(前期入試)は1,62名と1割くらい増えています。建築都市デザイン学科はデザイン教育に重きをおいた学科で、工学部に建築学科のほとんどが置かれ、比較的工学色の強い教育を行う大学の多い日本では、大きな特徴をもった学科といえましょう。

■建築学科をふたつのコースに分ける

建築学科の方は大学受験者総数の減少という波をもろに受け、前期入試で受験生を2割5分くらい減らしました。建築都市デザイン学科の学生定員を減らした分、建築学科で学生定

員を増やし190名にしたことも大きな負担になりました。

建築学科では、昨年度から今年度にかけて学科新設という大きな改革を行ったばかりですが、社会は大学に対してさらに改革を求めているという認識をもって、今年度も学科のあり方について精力的に検討を続けてきました。その結果、建築都市デザイン学科とも異なる方向性を持ち、さらに未来を見据えた社会の要求する人材の育成などを考え、来年の4月から、建築学科を「建築コース」と「環境コース」の新しいコースに別けて出発することを決め、具体的に動きはじめております。

新コースの内容は、建築コースでは計画と工学を基礎にした建築技術者の育成、環境コースでは建築を基礎にしつつ環境と安全についての資質を持った技術者を養成することを目指しています。これらのコースは、これまでの工学院大学建築学科の歴史を生かし、発展的に展開していくことができる分野とも考えています。それぞれの学生定員は、建築コースが120名(うち臨時定員増が30名で将来的には90名になる)、環境コースが70名で出発します。

建築系学科は、デザインと建築、環境の3つの単位になりますが、それぞれの特性を尊重しつつ、よい意味で競争しながら、厳しい大学冬の時代を乗り越え、前進していきたいと思っております。卒業生にも、新しい建築系学科のバックアップをお願い申し上げます。

■教員および学科事務職員の移動、受賞

昨年度をもって荻原正三教授、島崎勉教授、廣部達也教授、山崎弘教授、石川幹子特別専任教授、石田頼房特別専任教授、栗原嘉一郎特別専任教授が退職されました。荻原正三先生と山崎弘先生のお二人が名誉教授になられました。また、東正則先生が助教授に昇格され、さらに新任の先生に建築都市デザイン学科の教員として後藤治助教授(建築歴史・意匠)がなされました。後藤先生は3月まで文化庁におられた方で、日本建築史、歴史的建造物の保存・活用・修復を専門としています。建築学科事務室の職員である北沢千恵子さんが退職され、後任に窪田美津子さんがなされました。学内の役職では、水野宏道教授が大学の常務理事になられました。また、中島康孝教授が総合研究所所長になられました。

教員の受賞では、宇田川光弘教授が「太陽エネルギーの建築的利用に関する環境工学的研究」で日本建築学会から学会賞(論文)を、難波蓮太郎教授が「左官に関する一連の研究」で日本建築仕上学会から学会賞(論文)を受賞されました。おふたりとも長年にわたる研究が社会から評価されたわけで、建築系学科としてもとてもありがたいことです。

〈ご無沙汰しています-2〉 第2部の近況

望月 洵 (工学院大学建築学科教授第2部主任教授)



■入学

社会状況の変化に伴い入学志望者の数は、がくがくと減少しています。昨年度まで受験者数は400台でしたが、本年度は300を割りました。建築学科の場合、定員の数はなんとか埋まりましたが、2、3の他学科では定員割れが生じています。社会状況の変化は、18歳人口の減少、大学全体卒の増加、経済条件の皮相的向上です。2部は本学に限らず、近い将来、存立の基盤を失いそうです。

■様変わり

2部学生の構成は、かつては勤労学生が主体でしたがこれも今は昔の話になり、大半が俗にいうフリーターです。中には全く昼は無為に過ごしているの也有ります。本学附属高からの入学者が、一桁台になったのも時代の反映です。望まじき様変わりには、学士編入学生の増加です。他の学生による刺激を与え、かつ勤勉の度合いが高いことを考えて、学科としては、さらに学士編入学生の割合を高めることを進めています。

■反省

40有余年在籍した経験からは、2部卒業生の成果は1部卒業生にも優るとも劣らないものといえます。この2部の灯火を消したくないという思いは、大なり小なり多くの教員がもっています。しかし、社会状況の変化は急激で2部教育システムの改革の意欲もうち消されがちです。何よりも1、2部兼務の体制は教員を疲労させます。これから、どのようにするかは、まだ模索の段階です。

次年度のたよりには報告できると思います。

〈ご無沙汰しています-3〉 大学院建築学専攻 運営委員

山下 司 (工学院大学建築学科教授)



本年より『NICHE』にスペースを拡大してもらい、建築学専攻大学院の近況をお知らせできることは大変喜ばしいことです。1964年修士課程が、その2年後に博士課程が設置され、それから35年の歳月が流れましたが、その間の建築技術、都市計画、建築デザインの果たす役割は拡大する一方でした。大学院設置の当初は院生の数も少なく、またそれを受け入れる社会の評価もまちまちであったようですが、先輩諸君が30年かけて築き上げてきた実績のおかげで修士に対する評価が高まり、それに対応して修士課程進学者が急激に増加し、大学院教育に対する産業界の新しい要求も起こっています。

建築は云うまでもなく技術と芸術の総合化された人間の生活環境を構築する分野として長い歴史の中で文化と文明を創って来ました。特に近年の科学技術の急速な進展と地球環境の変化に対し、高度で多様な知識が必要になって来ました。建築技術、都市、建築環境、デザインに対する社会の要求に答えるべく優れた人材を送り出さなければなりません。現在、工学は、修士が最も尊重される分野になっています。それはハイテク技術を中心に技術が高度化され、学部教育では専門教育の基礎的分野しかカバーできなくなってきたからです。これからの修士課程修了者には、しっかりと基礎学力と高い応用能力を生かして計画、デザイン、研究開発等で創造力と即戦力を発揮することが期待されています。

大学院開設以来1998年度までに修士621名、博士6名が修了し、建築の各分野で高い技術力を発揮して活躍しています。

大学院開設当時からおられた先生方が最近次々と定年を迎えられ、大きな世代交代が起こっています。言うなれば第一世代から第二世代への代替りといえそうです。昨年の中島泰先生にはじまり、今年は荻原正三先生、山崎弘先生、広部達也先生、そして特専教授の栗原嘉一郎先生、石田頼房先生、

が定年で御退任になられました。さらに来年は難波蓮太郎先生がご定年の予定です。

世代交代につれ主要科目の担当も当然変更されます。現在計画系(計画、デザイン、都市、歴史)主要科目8科目、選択科目4科目、構造系主要科目3科目、選択科目3科目、生産系主要科目4科目、選択科目1科目、環境系主要科目3科目、選択科目3科目、それに加えて博士後期課程の特殊研究科目が12となっています。紙数の関係で詳細な科目名、担当者は述べられませんが、本年待望のブルティン研究科案内パンフレットが、日本語と英文共にでき上がりました。各専攻の教育目標、主要科目、選択科目、担当教員、研究室案内等かなり充実したものです。ぜひ一読され修士のリクルートなどに利用していただきたいものです。

急速な技術開発、社会的ニーズの変化に対応して高度の即戦的技術力、研究開発力、そして優れたデザイン能力の養成に向けて大学院の教科内容も当然変化して行わなければなりません。

そのため現在本学では学部、大学院共に自己評価、自己点検を鋭意進めています。近日中にその成果が現れると思います。

2000年度より現在選択科目担当の都市計画の野澤、構造の久田、環境の足立、大橋の各先生が主要科目担当に、そして計画の東、歴史の後藤(新任)、構造の大塚の各先生方が選択科目の担当になられる予定です。デザイン系では、製図室を改装しました。9Fの広い廊下を取込み学部の製図室を広げAV装置を充実し、プレゼンテーション環境が飛躍的に良くなりました。優れた作品をつくり、大いに利用してもらいたいものです。夏休み中には芝浦工大、武蔵工大、東京電気大、本学の希望者に対し日建設計、日本設計を中心とする第一線で活躍中のベテラン建築家たちによる特別のセミナーが9F製図室において開かれ、講師の方々に好評を博しました。一度ぜひ新しい製図室(相変わらず狭いですが)を覗いて下さい。製図室は良くなりましたが、デザイン系のコンペ入賞者ははなはだ低調です。教員も責任を感じています。

現在M1が61名、M2が63名、内13名が他校からの進学生、社会人入学が6名、留学生3名、博士課程後期が6名在学中です。この内、女子学生が24名います。建築業界の厳しさが反映して就職状況はかんばしくありません。OB・OG諸君、良い学生がいますのでぜひ声をかけて下さい。皆さんの益々の御活躍を祈っています。

〈ご無沙汰しています-4〉

建築学科(1年)・建築学科 建築学コース(2年以上)の 教育・研究の状況

近藤龍哉(工学院大学建築学科講師/学科幹事)



1部建築学科は昨年度(1998年度)まで建築学コースと都市建築デザインコースのコース別教育を行っていましたが、本年度(1999年度)から、都市建築デザインコースを発展させた建築都市デザイン学科を新設し、建築学科と建築都市デザイン学科を合わせて建築系学科となりました。そのため、1年生(1999年度入学生)は建築学科の新入生と建築都市デザイン学科の新入生が建築系学科の学生で、2年生以上は建築学コースと都市建築デザインコースの学生が建築学科の学生です。また、前段の主任挨拶で紹介がありましたように、建築学科をさらに2コース(建築コース・環境コース)に分ける計画が進捗しております。時代の変動を乗り切るための再構築ですが、ちょっと構成が複雑です。ここでは建築学科(1部1年生)と建築学コース(1部2年生以上)の現況をご案内します。

■建築学科の教育・研究(1999年度入学生)

今年度入学生は222名です。なお、(新)建築学科に所属する専任教員は20名です。

今年度入学生より卒業に必要な単位数を、卒業研究を除き116単位としました。昨年度以前は124単位ですから多少負担が軽減されました。必要単位数を減らした理由は、履修科目数を減らすことで履修した科目の学習密度を上げて欲しいとの狙い입니다。なお、教養科目は36単位~50単位、建築の専門科目は66単位~80単位修得することが義務付けられています。

専門科目は、計画系(計画、意匠、都市計画)必修科目を18単位、構造系必修科目を8単位、生産系必修科目を6単位、環境設備系必修科目を6単位修得した後、各進路に従い自由に履修できるようになっています。

5月下旬に新生と教員の懇親会を行いました。学生生活の心構え、建設業界の現状と就職などについて個別にざっくばらんな話を、酒を飲みながらしました。当然、学生はジュースだったようにアルコールを含んだ私の脳は記憶していません。できるだけ小人数教育、個別指導をしたいとのねらいから行ったものです。なお、1学年ごとで教員1名に対する学生数は10人程度です。

■建築学コースの教育・研究(1998年度以前入学の学生)

建築学コースに在籍する98年度入学生(2年生)は162名、97年度入学生(3年生)は210名、96年度入学生(4年生)は203名です。また、過年度生は56名です。

99年度の卒論生は213名です。卒論生の内訳は、計画系(計画、意匠、都市計画)が85名、構造系が30名、生産系が39名、環境設備系が59名です。計画系の研究室に所属する卒論生は各研究室毎に15名程度ですが、構造系では5名程度、生産系では10名程度、環境設備系も12名程度です。理数系離れ(めんどくさがり)と3Kを引きずっているのでしょうか。社会のニーズとのアンバランスを苦慮しております(筆者は構造系の教員です。)

■建築学科の教育・研究の今後

すでにご承知のように近く建築基準法が改定されます。また、建設関連の資格の見直し要求が外圧によるものを含め出ております。

建設関連の仕事に従事する技術者の育成を命題としてきた本学科では、これらの変化に伴い、コース制の再設定、カリキュラムの改定など、学習年限の変更も含めて検討しております。特色あるテーマを科目などに新設し、時代が要求する技術を学生に伝える努力をしております。タイムリーな教員人事の刷新も行っております。

計画系や設備系では卒業生を外来講師として招き、講座の担当をお願いしております。構造系では卒業生による講演会を定期的で開催しております。卒業生の皆様には、工学院大学建築学科の発展のために、後輩の指導にご協力をお願い申し上げます。

■お願い

インターンシップの導入を全学的に検討しております。皆様の職場で、実務者の指導を受けながら建築の実務を体験する科目の新設を検討しております。この科目は学生の教育に極めて有効と考えておりますが、良好に機能するか否かは協

力いただける企業のご理解と直接指導を担当頂く先輩諸氏のご協力が必要です。学生の受け入れをお願いにうかがった際はぜひともご協力をお願い申し上げます。

〈ご無沙汰しています-5〉

都市建築デザインコース・ 建築都市デザイン学科 の教育

野澤 康 (工学院大学建築学科助教授/学科幹事)



■建築都市デザイン学科の誕生

今年、工学院大学の建築にとって大きな転換点の年となりました。ご承知の通り、この4月にかねてから準備を進めてきた「建築都市デザイン学科」が開設されました。本学の建築系学科が、初めて正式な2学科体制となったわけです。

新しい学科を立ち上げるにあたっては、これまでの建築学科都市建築デザインコースでの経験を土台としながら、より新しいものを取り入れ、またこれからの建築界の進むべき道をも考え合わせて、それらに対応したより良い教育をできるようなカリキュラムを構築したつもりです。

昨年この「学科便り」では、望月大介教授がこの学科のコンセプトについては紹介しておりますので、もう少し具体的なカリキュラムの特徴をご紹介します。

この学科の専門科目は大きく6つに分けられます。設計演習科目、マルチメディアデザイン科目、建築デザイン科目、計画論科目、都市環境デザイン科目、建築技術科目であり、これらに加えて、卒業研究が最後のまとめとして位置づけられています。大半の科目は、これまでの都市建築デザインコースで開講されていた科目と同様ですが、より専門的な建築

都市デザイン教育という視点から、各担当者が内容を発展させていくこととなります。また、3、4年次の設計科目「建築都市デザイン。I II III」にはこの学科の教育の中核をなす科目であり、その教育方法、課題設定のしかたなどについて、次年度に向けて、兼任講師の方のご意見も聞きながら、工夫を凝らしていこうとしているところです。また、これも新学科教育の中核をなす「卒業研究」は3種類に分けられ、設計プロジェクトのみ、論文+設計、論文のみ、の3つから、各自の興味や適正に合わせて選択することになります。

新設のマルチメディアデザイン科目には、「デジタル・デザイン演習」「ヴァーチャル・デザイン演習」「コラボレーション・デザイン演習」の3科目があり、CADに限らず、CGやVRといった新しい技術の習得やそれらによる設計作業や空間体験、ネットワークを用いた共同設計プロジェクトなど、設計科目とリンクしながら進めていくものです。その他にも、他学科に先がけて「学外実習」を正式なカリキュラムとして位置づけています。この科目では、卒業生の皆様にもご協力いただくことになるかと思えます。

なお、建築都市デザイン学科という名称からは、構造や設備、材料を知らずに4年間を過ごすと思われるかもしれませんが、建築の基本的な知識を広く会得することがデザインの第一歩と考えていますので、ご心配には及びません。新学科には技術系の教員も所属し、充実した建築技術教育をしていきます。

こうした新しいカリキュラムは、まだ1年生のみが対象であり、2年生以上はこれまでと同様の2コース制のカリキュラムが適用されていますので、新学科カリキュラムの専門科目という意味では、まだごくわずかししか開講されていません。しかし、来年、再来年と学年進行で新たな科目が開始されるので、各教員はそのための準備に追われています。

■都市建築デザインコースの教育の変更点

2年生以上については、都市建築デザインコース設置以来のノウハウの蓄積のもと、より質の高い教育を目指して、学生とともに教員も努力しております。その中で一つの大きな変化は、3年次後期の「建築セミナー」の研究室決定時期を遅くしたことがあげられます。

これまで、6月に研究室の選択・決定を行っていたのですが、それを7月の夏休み前に説明会実施、9月に研究室の決定を行う方法に変更しました。これは、かねてから、分野によって志願者数のかんりのアンバランスがあり、より良い方法を模索していたのですが、選択時期を遅くすることで、3年前期にかなりの数が開講される専門科目を受講し、設計に限らない

幅広い建築の各分野を知った上で、就職も含めた自分の将来を学生が考え、あるいは先輩とも相談しながら、進む道を選んでほしいという願いが込められています。この原稿の執筆段階では、まだ本選考を行っていませんので、この方法がうまくいくかどうかを結論付けることはできませんが、このような変化があったことをご報告申し上げる次第です。

■おわりに

いずれにしましても、冒頭に述べたような本学建築系学科に限らず、わが国の建築(建設)業界が大きな転換点に向かっています。そのような中で、われわれもそうした時流に乗り遅れることなく、しかも我を失ってそれに飲み込まれて流されてしまうことなく、機敏に変化に対応していくことが必要と考えております。また、近い将来に到来する大学志望者の全入時代を前にして、より良い教育を厳しく施すことによって、社会のニーズに応える優秀な人材を輩出していかなければならないと肝に銘じております。そのためには、われわれ教職員スタッフだけではいかんともしがたいこともあろうかと思えます。その際には、OB・OGの方々の強力なご支援を賜ることができればと願っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

〈ご無沙汰しています-6〉

入試状況

広沢雅也 (工学院大学建築学科教授)



前回の報告 (Vol.22) にひきつづき、建築系学科の入試状況について近況報告を致します。前回は少子化 (1992年から20年間に約40%強の減少) による大学志願者の急激な減少傾向、これに対する修士進学者の急増 (1998年の101名から4.2倍) などの傾向の中で、本学では受験者の微減 (4.0%) にとどまっている状況について報告しました。

こうした中、本学では志願者減少傾向に合わせて、学部

入学定員(99年現在臨時定員増240名を含む1,160名)を今後数年間に1,040名(幅定240名の半数返上)に減員する計画となっています。

本年は、都市建築デザインコースが新たに建築都市デザイン学科として独立し、始めて受験生を迎えました。その結果、新学科は昨年を僅かながら上回る志願者(前期・サテライト、センター利用および後期を含め、'98年の2,017人から2,031人)を得ましたが、これに対し建築学科は2,868人('98年)から2,334人('99年)と実に約20%の大幅減となってしまいました。

建築学科の志願者減少は全国的な傾向で、昨年のうちから心配されていたのですが、予想以上に厳しい結果でした。工学院大学の10学科・コースの中でも、建築学科(コース)は例年、志願者倍率が上位3以内に入っていたのですが、'99年は下から4番目に転落してしまいました。入試状況と同じく就職状況も非常に厳しく、特に女子学生は苦戦を強いれています。

こんな中で、2000年度の入試戦略としてはサテライト入試会場の増加(従来の7会場に、水戸、静岡、長野を追加)や後期入試の早期実施などを予定しています。

将来に向けて、なかなか明るい展望が見出せない状況ですが志願者減に伴って心配される学力低下に対しては、我々教員一同が力を合わせ、何よりも学生ひとりひとりがやる気のある技術者に育つよう教育に努めることが肝要と理解しています。また、OB諸兄のご協力により、諸方面から学生の就職に対してご支援をいただいております、この厳しい状況も近い内に改善されるものと期待しています。

OB諸兄におかれましても、このような入試状況をご理解の上、一般入試、センター入試、指定校推薦などに優秀な学生を多勢、ご推挙いただけますようお願いする次第です。

<ご無沙汰しています-7>

就職状況

望月洵(工学院大学建築学科教授/就職委員)

■不況

朝鮮戦争特需の神武景気後やってきた昭和33年初めの鍋底不況、オリンピック景気後の証券不況、列島改造景気後のオイルショック不況、バブル景気後の平成不況と不況はほぼ10年の周期でやってきていますが、平成不況が最も長く、かつ深刻です。建築の世界の基盤を揺るがしている点に特徴があります。この波をもろに受けて、ここ4~5年来、特に本年の

就職状況は学生の希望を打ちくたくほどのものです。

■学部

1部300人、2部100人のうち、大学院予定60人を除く、340人ほどが潜在的就職希望者です。実際、就職活動をしているのは60%強です。現時点で内定者数はその50%にも達していないと思います。施工、設計、住宅とあらゆる職域で求人を探し、例年活況の設備の分野でさえ、あまりよくありません。特に女子は、男女均等雇用法も背に腹はかえられずで、全くというほどです。法の手前、表向き受験は拒否できないため、かなりの女子学生は無駄玉をうっているのが現状です。

■大学院

向学の志し止み難くの院生もかなりいますが、2年後には景気もどるかもと微かな希望をもって進学した院生も多々います。彼らにとって、あてのはずれた思いかと。院生の学力不足もひしひしと感ぜられ、これも就職状況悪化の一因ですが、社会の大学院に対する評価が急激に様変わりしたことが主因といえます。明確な理由は定かではありませんが、かなりの数の企業が院生採用に拒絶反応を示しています。

■様変わり

今までは、就職情報の大半は就職課に届く求人票で、そのほかに教員経由、公務員関連の公的な情報でした。求人票は昨年度で700強、本年度は500を割っています。さらに一票あたりの求人数も6掛けです。多くは不況のためですが、企業は情報公開にインターネットを利用し、広く人材を求めようになり、その中には求人票を送ってこない企業も多々あります。極論すると求人仲介者として大学を利用しない流れに変わりつつあります。

■対応

お手上げの感なきにしも非ずというのが率直なところ。早晩、大学の就職斡旋業務はなくなるかもしれません。

就職開拓に精を出すより、学生の学力、知力、活力……などの平均水準を上げるのが一番の対応と考えています。もっともこれは一朝一夕にできない難事ですが……。

■お願い

本誌が発行される頃、未就職の学生が4割はいることと見えます。玉がいるかもしれません。卒業生にはよい話がありましたらお知らせください。

第33期(1998年度)事業報告

1. 同窓会誌『NICHE』vol.22発刊。

本年度は10,500冊を印刷。同窓生、新卒業生(新会員)、大学建築学科教職員へ配布。

2. 各研究室OB会活動の援助。

本年度は初田研究室へ通信費として援助。

3. 名簿の編集、発刊、新会員への贈呈。

CD-ROM校友会会員名簿のデータの編集・整理。3月20日の大学卒業式で卒業生(新会員)へ贈呈。

4. 総会の開催。

1998年5月31日、新宿校舎11階第5会議室にて30名の同窓会員の出席により開催。

総会后、校友会総会・講演会・懇親会へ参加。

5. 1998年度大交流懇親会(忘年会)の開催。

12月5日、新宿校舎1階アトリウムにて同窓生・招待者・在校生 総出席者145名により盛大に開催。

6. 準会員への援助(論文・コンペ作品等への援助)。

在学生を対象にコンペの入賞作品への援助として4作品へ援助。

第33期(1998年度)一般会計報告

(単位:円)

科目	予算額	決算額	備考・内訳	
(収入の部)				
a) 会費収入	3,712,000	3,958,000	7,000円×393人 1,000円×1,207人	
b) 総会通知発送援助費	884,400	880,000		
c) 年会費	900,000	1,364,448	郵便振替 VISAカード	1,174,000 190,448
d) 雑収入	1,200,000	2,220,500		
① 寄付金	700,000	641,000		
② 懇親会会費	500,000	394,500		
③ 会誌広告料	0	1,185,000	15社	
e) 銀行利息	100,000	14,105		
当期収入合計(A)	6,796,400	8,437,053	前期繰越収支差額	
前期繰越収支差額	7,208,444	7,208,444	三井信託定期口座	6,000,000
収入合計(B)	14,004,844	15,645,497	三井信託普通口座	1
			第一勧銀普通口座	1,007,180
			郵便振替	0
			現金	201,263

第33期(1998年度)運用財産目録

	第33期当初	第34期期末	差額
1) 三井信託銀行定期口座	6,000,000	4,000,000	-2,000,000
2) 三井信託銀行普通口座	1	12,113	12,112
3) 第一勧業銀行普通口座	1,007,180	2,959,434	1,952,254
4) 郵便振替口座	0	0	0
5) 現金	201,263	168,081	-33,182
合計	7,208,444	7,139,628	-68,816

第34期(1999年度)一般会計予算

(単位:円)

科目	予算額	備考・内訳	前年度決算額	前年度予算額
<収入の部>				
a) 会費収入	4,052,000	7,000円×406人 1,000円×1,210人	3,958,000	3,712,000
b) 総会通知発送援助費	880,000	校友会からの援助の 建築負担分	880,000	884,400
c) 年会費	1,500,000	郵便振替、VISAカード	1,364,448	900,000
d) 雑収入	1,700,000		2,220,500	1,200,000
(1) 寄付金	500,000		641,000	700,000
(2) 懇親会会費	0		394,500	500,000
(3) 会誌広告料	1,200,000	15社	1,185,000	0
e) 銀行利息	14,000		14,105	100,000
当期収入合計	8,146,000	前期繰り越収支差額	8,437,053	6,796,400
前記繰り越し収支差額	7,139,628	三井信託定期口座 4,000,000	7,208,444	7,208,444
収入合計 (D)	15,285,628	三井信託普通口座 12,113 第一勧銀普通口座 2,959,434 郵便振替 0 現金 168,081	15,645,497	14,004,844

科目	予算額	備考・内訳	前年度決算額	前年度予算額
<支出の部>				
1) 会誌発刊費	3,500,000		3,506,152	1,550,000
(1) ニッチNO.23印刷費	1,800,000	10,500部	1,802,154	1,100,000
(2) 編集費	900,000		901,050	400,000
(3) 雑費	800,000	求人ダイレクトメール発送費 封入作業費他	802,948	50,000
2) 各部会費	24,000		12,000	20,000
(1) OB会通信費	24,000		12,000	20,000
3) 同窓会名簿整理費	400,000		360,000	370,000
(1) 整理費	360,000	30,000円×12ヶ月	360,000	360,000
(2) 雑費	40,000		0	10,000
4) 総会費	1,861,000		1,837,342	1,324,400
(1) 総会通知印刷費	500,000	9,700通	471,729	400,000
(2) 総会通知発送費	1,261,000	9,700通	1,271,480	824,400
(3) 雑費	100,000	総会、運営委員会弁当	94,133	100,000
5) 全国大会負担金	250,000		2,307,909	2,565,600
(1) 島根大会寄付金	150,000	300,000円の内今年度分		
(2) 島根県大会企画協力費	100,000	建築ツアー企画、諸雑費		
6) 準会員への援助	1,100,000		254,751	1,100,000
(1) コンペ等援助金	800,000	入選者に援助	40,000	800,000
(2) 同窓会名簿製作費	300,000	名簿CD-ROM製作	214,751	300,000
7) 本部費	100,000	コピーカードなど	8,255	100,000
8) 予備費	200,000	慶弔費、各種協賛金、	219,460	100,000
当期支出合計 (E)	7,535,000		8,505,869	7,130,000
次期繰り越し収支差額 (D) - (E)	7,750,628		7,139,628	6,874,844

第33期(1998年度)会計予算

科目	予算額	備考・内訳	前年度決算額	前年度予算額
(収入の部)				
a) 会費収入	4,052,000	7000円×406人 1000円×1210人	3,958,000	3,712,000
b) 総会通知発送援助費	880,000	校友会からの援助の建築負担分	880,000	884,400
c) 年会費	1,500,000	郵便振替、VISAカード	1,364,448	900,000
d) 雑収入	1,700,000		2,220,500	1,200,000
① 寄付金	500,000		641,000	700,000
② 懇親会会費	0		394,500	500,000
③ 会誌広告料	1,200,000	15社	1,185,000	0
e) 銀行利息	14,000		14,105	100,000
当期収入合計	8,146,000	前期繰越収支差額	8,437,053	6,796,400
前記繰越収支差額	7,139,628	三井信託定期口座 4,000,000	7,208,444	7,208,444
収入合計(D)	15,285,628	三井信託普通口座 12,113 第一勧銀普通口座 2,959,434 郵便振替 0 現金 168,081	15,645,497	14,004,844
(支出の部)				
1) 会誌発刊費	3,500,000		3,506,152	1,550,000
① ニッチNO.23印刷費	1,800,000	10,500部	1,802,154	1,100,000
② 編集費	900,000		901,050	400,000
③ 雑費	800,000	求人ダイレクトメール発送費、 封入作業費他	802,948	50,000
2) 各部会費	24,000		12,000	20,000
① OB階通信費	24,000		12,000	20,000
3) 同窓会名簿整理費	400,000		360,000	370,000
① 整理費	360,000	30,000円×12ヶ月	360,000	360,000
② 雑費	40,000		0	10,000
4) 総会費	1,861,000		1,837,342	1,324,400
① 総会通知印刷費	500,000	9700通	471,729	400,000
② 総会通知発送費	1,261,000	9700通	1,271,480	824,400
③ 雑費	100,000	総会、運営委員会弁当	94,133	100,000
5) 全国大会負担金	250,000		2,307,909	2,565,600
① 島根大会寄付金	150,000	300,000円の内今年度分		
② 島根県大会企画協力費	100,000	建築ツアー企画、諸雑費		
6) 準会員への援助	1,100,000		254,751	1,100,000
① コンベ等援助金	800,000	入選者に援助	40,000	800,000
② 同窓会名簿製作費	300,000	名簿CD-ROM製作	214,751	300,000
7) 本部費	100,000	コピーカードなど	8,255	100,000
8) 予備費	200,000	慶弔費、各種協賛金、	219,460	100,000
当期支出合計(E)	7,535,000		8,505,869	7,130,000
次期繰越収支差額(D)-(E)	7,750,628		7,139,628	6,874,844

会計監査報告

帳簿、領収書監査の結果、記載が正確であることを認めます。

平成11年4月6日

建築学科同窓会監査委員 高信碩文 ㊟

南雲正博 ㊟

建築学科同窓会運営・活動費および同窓会誌『NICHE』に関する寄附金(一口2,000円)のお願い

今回発刊されました『NICHE』23号は、前号に引き続きA4版へと誌面を拡大、記念体育館プロポーザルや特集記事などいろいろな企画にチャレンジしよりいっそうの内容充実を心掛けました。今後、同窓会では誌面の充実をさらに目指して皆様のご期待にそえるよう、多くの諸先輩のご参加を期待しております。会員相互の活動の柱となります同窓会誌『NICHE』に忌憚のないご意見をお寄せください。

同窓会の運営や活動の主な内容である同窓会誌『NICHE』の発行については、本年度より年会費などにより運営されます。しかし、年々会員数が増加し、前回1998年22号の発刊・発送費は9,250名分としてあわせて320万円近くになっており、1999年2月末発刊を目標の23号の諸経費は、昨年同様大幅にアップする事が予定されています。今後発刊を継続し、皆様のお手元にお送りするのが困難な状況になっています。

本年は工学院大学校友会VISAカードによる年会費自動振込を中心に、運営及び活動費や同窓会誌の編集・発送費として年会費を集め対応することを目指していますが、これだけではまかないきれず、寄附金(一口2,000円)をあわせて考えています。

同窓生の皆様には、この趣旨をご理解いただき、少しでも多くご援助していただきたく、何卒ご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

近年のご協力いただきました寄附金(前年度までは編集・発送費、賛助金と区別していましたが、今回より一括し、寄附金としてまとめます)の金額は下記の通りです。

1994年度	編集・発送費	554,000円	(277口)	
	賛助金	766,000円	(383口)	(『NICHE』19号p.33参照)
1995年度	編集・発送費	648,000円	(324口)	
	賛助金	919,000円	(459.5口)	(『NICHE』20号p.36参照)
1996年度	編集・発送費	566,000円	(283口)	
	賛助金	490,000円	(245口)	(『NICHE』21号p.38参照)
1997年度	編集・発送費	492,000円	(246口)	
	賛助金	478,000円	(239口)	(『NICHE』22号p.50参照)
1998年度	「NICHE」発刊のための寄附金	601,000円	(約300口)	(『NICHE』23号p.49参照)

なお、上記「寄附金」のご送金には、同封の「同窓会宛振替用紙」をご利用ください。また、お手元のカードを工学院大学校友会VISAカードに、まだ切り替えていらっしゃらない方は、年会費として4,000円をこの振替用紙でお振り込み頂けますようお願い申し上げます。

年会費は、工学院大学校友会VISAカードによる、自動引き落としになりますと、事務手続きの簡素化や、校友会活動への支援などの面から年会費は3,000円に割引になります。是非切替えて頂けますようお願い申し上げます。

工学院大学校友会会員名簿CD-ROMのご紹介

工学院大学建築学科同窓会会員の皆様へ

今回、校友会会員相互の交流促進を目的として会員名簿をCD-ROMにより発行しました。工手学校から現在までの各学校卒業生全員の名簿を整理し、校友会会員約10万人の氏名、住所、勤務先などの情報が検索できます。CD-ROM 1枚なので保存もかさばらず、毎年バージョンアップされますので買い換えれば、いつも最新情報が入手できます。お手持ちのパソコン (Windows) にてお手軽に検索ができます。

販売価格は、1999年版1枚 3,000円 (別途送料) です。工学院大学校友会 STEC・VISAカードをご利用の方には、割引料金1,500円 (送料込) で販売いたします。割引料金では是非ご購入下さい。この STEC・VISAカードのお申込みは、下記社団法人工学院大学校友会にお願いいたします。このカードは、同窓会の年会費自動引き落としのために活用されています。

■Windows 3.1 またはWindows 95

■推奨動作環境: i486プロセッサ以上/メモリ16MB以上/CD-ROMドライブ

□お申込み先: 工学院大学校友会

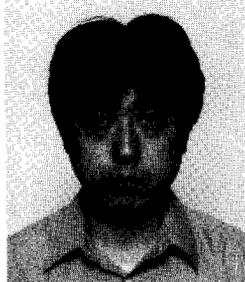
東京都新宿区西新宿1-24-2 〒163-8677 tel.: 03-3342-2064



景気がなかなか回復せず、建築界も厳しい状況が続いていますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。私は今年の3月に卒業し、だいぶ会社にもなれてきたところです。就職難でなかなか就職できずにいる友達も多く、みな元気でやっているのか心配です。CD-ROMは就職情報を集めるのに大変役立つと思います。

また、友達との連絡先もこの1枚ですぐにわかり大変心強いです。社会にでて学生の時以上に友達のありがたみを実感しています。卒業生の皆様のご健康とご活躍を祈念申し上げます。

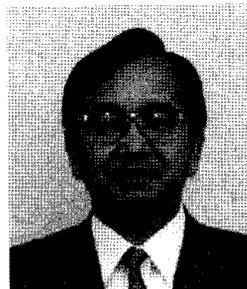
(川村知嘉・平成11年建築学科卒業/
アルキノバ&都市建築デザイン研究所)



早いもので大学を卒業してから7年が過ぎましたが、学生時代の友人にも相変わらず世話になり、よく大学の研究室にも足を運んでいます。

CD-ROMを見てみると、改めて校友の数の多さに驚きと、勇気がわいてきます。当初、CD-ROMよりも、今まで使っていた校友会名簿の方が、使い勝手がいいと思っていましたが、ちょっと覚えると、検索の仕方も簡単で、今まで苦労して探していたのがばかばかしくなってきました。この便利さを、数千円の価格で買えるならとてもお得だと思います。毎年バージョンアップして最新の情報、連絡先が確認できるCD-ROMを推薦します。裏方の校友会の皆さんお疲れでした。

(菅家幹・平成4年建築学科卒業/小沢明建築研究所)



1997年には創業50年を迎えた当社は、首都圏を中心に、自社での分譲事業に加えて、公団・大手ディベロッパー・ゼネコン等との共同・受注事業など、戸建分譲住宅が中心で、他に注文住宅やRC建築・分譲マンションなどを手がけています。CD-ROMを開きますと32名の校友が勤務しています。営業・設計・施工中の受注先や確認申請先に校友がいることは、大変心強いですね。新しい受注・交渉先が発生致しますと、相手方に校友は居ないかCD-ROMを利用させていただいています。この度、社内個人事務所として土地家屋調査士事務所を開設致しました。建築完成時等で必要な登記業務を行う事務所です。CD-ROMを利用して、営業にお伺いいたしますのでよろしくお願いいたします。

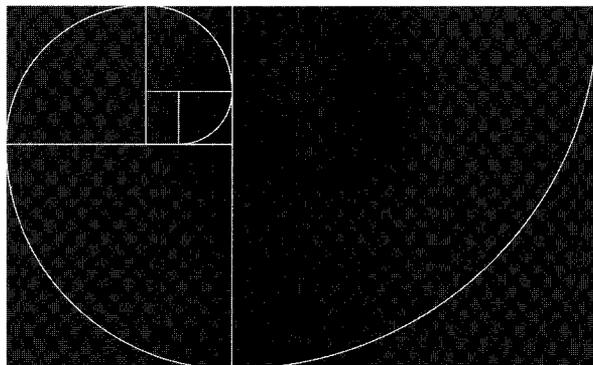
(田野辺幸裕・昭和44年建築学科卒業/細田工務店)



今まさに、コンピューターや、インターネットの情報化時代の到来です。建築界でも机の上で図面を書くだけでなく、コンピューターのモニターが机と入れ替わってきました。これも時代の流れであり、CD-ROMもその流れの中の一部です。卒業して数年、数十年も経つと、その友人知人の消息を知るのにも、校友会会員名簿CD-ROMによって、一瞬に検索できることは今までの厚い会員名簿で探すよりもずっと効率的で場所もいりません。また、卒業生10万人の情報によって、友人の連絡だけでなく先輩や、後輩の確認をして業務の展開の可能性が無限に広がっていくのではないのでしょうか。卒業生の今後のご活躍を祈念申し上げます。

(藤田修功・昭和55年/アーキデザイン研究所)

未来のコンピュータに贈る



MiniCAD
VectorWorks®
Object-Based CAD for Professionals

MiniCAD後継。それはCAD、
そしてOSの枠を超える。

VectorWorksは、オブジェクト指向CADの時代を先取りしてきた12年の実績をもつMiniCAD後継ソフトです。MiniCAD7のコアエンジンを引き継ぐとともにオブジェクトベースのCADエンジンを新搭載しました。ドアや家具などの数多くのプラグインオブジェクトにより作図効率の向上とリンケージを計りました。さらに、VectorWorksでは、組織型設計に必要なネットワークコラボレーションが可能なワーク

グループ機能を実現。JW-CADデータ取込機能、DXF互換に対する機能強化、BMP/JPEG等のイメージファイルの取り込み/取り出し等により、他で作成したデータの有効活用が可能です。また、属性の設定等が行えるクラス機能の大幅な改善により作図環境が一段と向上します。VectorWorksは、Windows/Macintoshの枠を超え「デザイナーの為のトータルな設計環境」に生まれ変わりました。

標準価格 Macintosh/Windows 各198,000円(税別) / ハイブリッド版 288,000円(税別)
Macintosh/Windows 追加1ライセンス 各100,000円(税別)

VectorWorksに関する詳しい製品情報、セミナー案内、MiniCAD操作技能保持者認定試験例題集などの各種情報をホームページ、FAX情報案内にて公開しています。
<http://www.AandA.co.jp/VectorWorks/> FAX情報(AQUA) FAX 03-3208-1057

A&ACO.,LTD.

エーアンドエー株式会社
東京都新宿区西早稲田2-20-15 住友不動産ビル
TEL 03-5285-2448 FAX 03-5285-2350

MiniCAD、VectorWorks、RenderWorksは米国Diehl Graphsoft Inc.の登録商標です。その他記載された会社名及び製品名などは該当する各社の商標または登録商標です。製品の仕様は予告なく変更する場合があります。

MUTOH

創造、大切にします

設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。あらゆる設計現場で、高い信頼性と納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、教育の現場でも活躍してくれます。

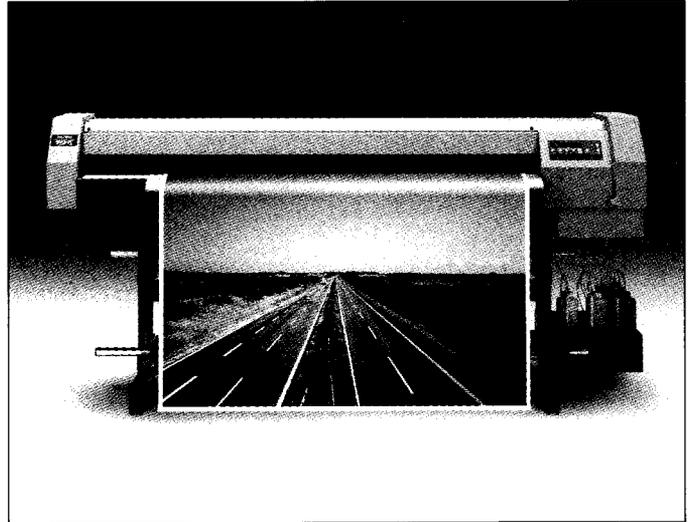
教えるのも、教わるのも、MUTOHなら安心です。

屋外専用大型フルカラー インクジェットプリンタ

ラミレス

PJ-1304NX

ラミネート不要で成果物のコストダウンと納期短縮を両立。屋外サインの制作で、避けられなかったラミネート加工の手間と時間を一気に解消したのが屋外専用大型フルカラーインクジェットプリンタ「ラミレス」です。独自に開発した溶剤系顔料インクの採用により、手間と時間のかかるラミネート加工がまったく不要。優れた耐水性により3年相当の耐候力を実現しました。



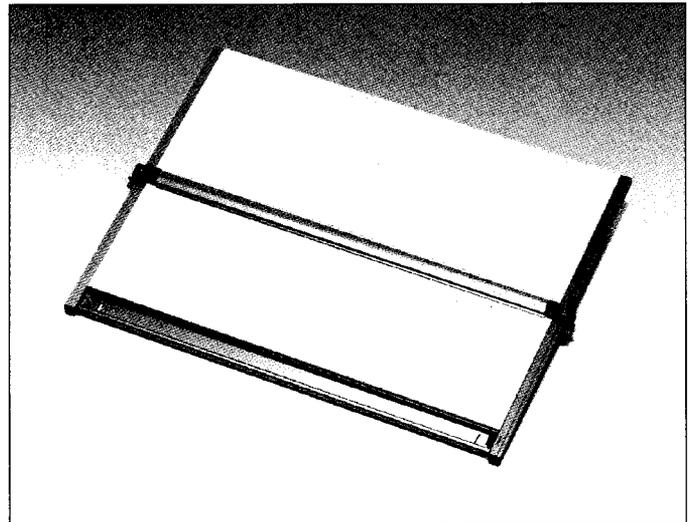
LINER BOARD

UM-09NK

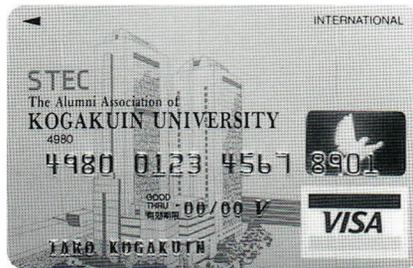
塩ビシート圧着鋼板製図板使用

場所を選ばず高い精度と操作性が得られるコンパクトな平行定規、ライナーボード。耐久性に優れ快適な操作性を提供するシンクロベルト方式を採用した本格派。A1サイズまでの作図に対応。図面への固定は、付属のマグネットプレートでワンタッチ。しかも軽量・コンパクトです。簡単に持ち運びできますので、思いついたらそこがワークスペース。アイディアを生み出す頼もしい片腕です。

工学院
特別仕様



あの頃も、今も輝き続けている信頼がある。



世界No.1カード・VISAとの提携により輝き続ける、
工学院大学校友会VISAゴールドカード・VISAカード。
VISAならではの高い信頼と多彩なサービスをご実感いただける
エンブレムカードを、工学院大学校友会のメンバーの皆様にお届けいたします。
国内ではもちろん、海外でもきっとご満足いただける一枚。
この機会にぜひお申し込みください。

あなたの暮らしをしっかりとサポート

VISA市外通話割引サービス

市外通話料金がご利用金額に応じて16～20%割引となります。
サービス提供会社：(株)日本総合研究所(一般第二種電気通信事業者)

国際電話も格安で。

VISAスーパーエコノミーフォン

世界183の国・地域へ格安料金で通話ができるうえ、月々5,000円以上利用すれば、5,000円超過分が15%割引になります。

サービス提供会社：(株)KDDコミュニケーションズ(一般第二種電気通信事業者)

カードを提示するだけで特別優待割引。

プライムクラブ

Prime Club
日本で世界で特別優待

国内50,000店の飲食店、ホテル、レンタカー、美容室、海外34都市1,500店の一流ブランド店、免税店、デパート、レストランなどで5～20%の特別割引サービスが受けられます。

(一部プレゼント特典のお店もあります)

海外・国内の旅行をもっと便利に、快適に。

VISAジャパンデスク

VISAジャパンデスクは東京を含む世界主要44都市に設置。現地スタッフが常駐して日本語で最新情報案内からトラブル時の対応までサポートします。またレストラン、ゴルフ場のご予約など、出発前のご準備はVISAジャパンデスク[国内]が承ります。



◆ゴールドカードならではの特典サービス◆

ご入会資格：原則として満30歳以上・年収500万円以上・勤続年数(自営の方
は営業年数)5年以上

保険サービス 保険料は弊社負担

●最高5,000万円の海外・国内旅行傷害保険
海外・国内の旅行中の死亡・後遺障害などを最高5,000万円まで補償。

●2,000万円の国内シートベルト傷害保険
国内で車のシートベルト着用時の事故による死亡・重度後遺障害の場合、2,000万円を補償。

※海外旅行傷害保険は、ご加入日(カード発行日)以降に日本をご出発の旅行から対象となり、補償期間は1旅行につき最長3か月で、ご旅行の都度適用されます。

※国内旅行傷害保険は、事前に旅費等をカードでお支払いいただくことを前提とします。

引受保険会社/住友海上火災保険 株式会社

ゴールドデスク フリーダイヤル

国内線航空券やゴルフコースのご予約・手配、全国の提携ホテルのご予約(優待特典も含む)などをフリーダイヤルで承ります。

お買物安心保険(動産総合保険)

カードでご購入になった商品が万一破損したり盗難に遭った場合、ご購入日から90日間、年間100万円(ゴールドカード会員は年間300万円)損害を補償いたします。保険料のお支払いや事前の手続きは一切不要です。

※一部補償の対象とならない商品がございます。

引受保険会社/住友海上火災保険 株式会社

法人 工学院大学校友会 VISAゴールドカード VISAカード

ご利用は計画的に。

●お問い合わせ・お申し込みは●

住友カードインフォメーションデスク 東京 ☎ 03-5392-7411 大阪 ☎ 06-6228-1222

受付時間/9:00～17:00 年中無休(ただし12/30～1/3を除く)



株式
会社

住友クレジットサービス

東京本社/〒105-8011 東京都港区新橋5-2-10
大阪本社/〒541-8537 大阪市中央区今橋4-5-15

近畿財務局長(6)第00209号



ふうーっと、
ひとこち。

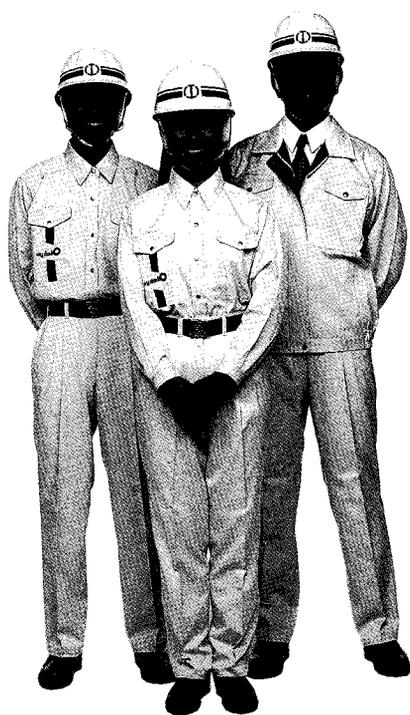
ほっ、とりラックスできる時間や、
ふうーっ、と人心地つける空間っていいですね。
生き生きとしたインスピレーションも
つぎつぎとわいてきそうです。
すべてのヒトを自然体に開放できる
空間創りを目指しています。
建設・都市・環境クリエイターANDO。

ANDX 安藤建設

本 社 東京都港区芝浦3-12-8 〒108-8544 TEL (03) 3457-0111
ホームページ <http://ando.topica.ne.jp>

Odakyu

子供たちの 子供たちに、誇りたい。



ビルも、道も、川も、街も、
決して、一世代だけの財産ではありません。
だからこそ、いまという時代を豊かにしながら、
次の時代にも、大きな満足を生み出せるように。
先進の技術、そして、人や自然への繊細な感性を大切にしながら、
私たち小田急建設は、子供たちの子供たちに誇れる、
そんな仕事をめざしています。

- 部 長 戸 澤 豊 夫 (S40年卒工学部)
- 部 長 中 島 武 夫 (S40年卒工学部)
- 部 長 杉 井 元 昭 (S42年卒工学部)
- 部 長 山 崎 達 雄 (S44年卒工学部)
- 部 長 吉 田 一 男 (S46年卒工学部)
- 部 長 中 沢 建 次 (S50年卒工学部)

小田急建設株式会社

本社：東京都新宿区西新宿4-32-22 TEL 03-3376-3101
<http://www.odakyu-kensetsu.co.jp/>

私たちのいちばんの技術は、
お客様の思いを読み取る技術です。

大成建設

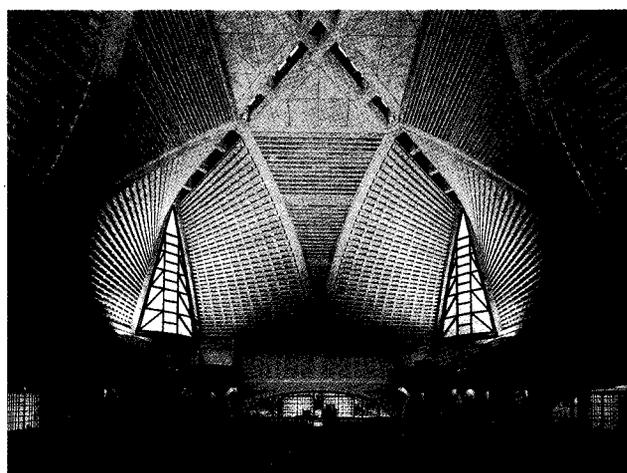
東京都新宿区西新宿1-25-1
TEL.03-3348-1111(大代表)
<http://www.taisei.co.jp/>

個々の技術はもちろんですが、何よりも大成建設が胸をはって誇りたいのが
お客様の思いを読み取る技術です。私たちはご利用いただく方の率直な声から引き出された
真のニーズをしっかりと把握し、すべてのプロセスに
反映させながら大きな満足を創造します。



地図に残る仕事。

未来へ——安心を創る^{つく}



宗教法人ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会



FUJHI

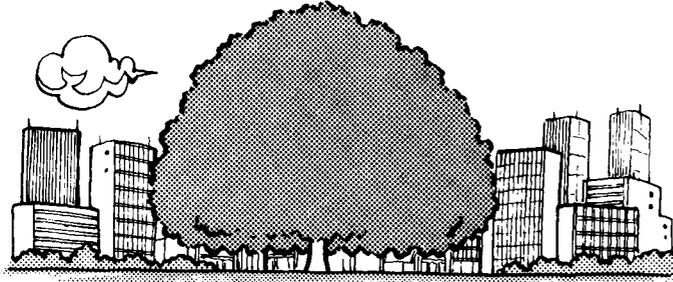
藤木工務店

本社 〒540-0028 大阪市中央区常盤町1-3-8 ☎06-6966-0400 (代)

本支店 大阪・東京・横浜・京都・倉敷・四国・福岡

営業所 北関東・埼玉・多摩・相模大野・静岡・名古屋・泉南・和歌山・西宮・神戸・岡山・広島・愛媛・松山・長崎

深呼吸できる環境づくり



よりよい人間・生産環境の創造を

 **朝日工業社**

本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7
TEL (03) 3432-5821

ただひとつの存在であるために。

今、私たちがしなければならぬこと、

私たちにしかできないこと。

前田建設は、一人ひとりの熱意と技術力を生かし、

いつでも最高の品質をお届けできる、

確かな存在感をもった企業をめざしています。



 **前田建設工業株式会社**

MAEDA
〒102-8151 東京都千代田区富士見2丁目10番26号
<http://www.maeda.co.jp/>

1・2級建築士をめざすなら、合格率が違う、
日建学院へ。

受講生受付中!!

●案内書無料進呈●

朝報

学割

当学院入学時に
エスティックカード(工学院大学OB会カード)を
ご提示いただけましたら、
学費の割引を適用させていただきます。

あなたも日建学院なら、
夢に手が届く。

◎ 1級建築士輩出で毎年日本一の合格システム !!

前年度実績も驚異の高率をマーク!

- 1級建築士合格者占有率 **65.5%** (平成10年度)
日本全国の1級合格者7,214人中、4,728人は、日建学院生です。
- 2級建築士合格者占有率 **55.4%** (平成10年度)
日本全国の2級合格者15,006人中、8,316人は、日建学院生です。

学科(1次試験)の合格率!

- 1級建築士 合格率 **60.1%**※
■ 2級建築士 合格率 **88.4%**※
■ 宅建取引主任者コースも高い合格率を誇ります!!

※印は、過去5年間の当学院基準達成者の学科試験合格率です。

開講コース案内

- 1・2級建築士科(学科・設計)コース
■ 宅建取引主任者コース
■ 1・2級建築施工管理技士コース ■ 土地家屋調査士コース
■ 給水装置工事主任技術者コース

忙しい方、時間がない方のための
土木関連講座も受講生大募集中!!

■開講コース

- 1級土木施工管理技士コース
- 2級土木施工管理技士コース
- 1級造園施工管理技士コース
- 2級造園施工管理技士コース
- 1級管工事施工管理技士コース
- 2級管工事施工管理技士コース
- 2種下水道技術検定技士コース
- 測量士補コース



短期集中講座

自宅学習教材が充実。
資格習得を早く望まれる方に最適です。

*『教育訓練給付金』指定講座多数有
お取り合わせは、下記、本部までお願いします。

主要都市をネットワークした全国130校・600常備教室は業界No.1の規模。

(株) 建築資料研究社の

日建学院

本部/東京都豊島区東池袋1-21-16
〒170-0013/日建学院ビル7F
☎03-3983-5001 (代)

前年度の全国日建学院受講者数
101,159 名

自分、超える。

あなたの夢の実現と
資格取得をサポートします。

【教育訓練給付制度】 **20万円**を限度に 受講料の8割を **給付!**

労働大臣指定
『教育訓練給付制度』
対象講座

- 一級建築士養成講座
- 二級建築士養成講座
- 宅建総合講座
- 1級建築士養成講座
ビクトリーコース
- 2級建築士学科コース
- 2級建築士設計製図コース
- 1級建築士設計製図コース
- 2級短期設計製図コース
- 1級建築士短期設計製図コース
- 1級建築施工管理技士
ビデオ通信講座

*支給条件等がありますので、
詳細は下記本校までお問い合わせ下さい。

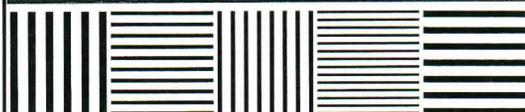
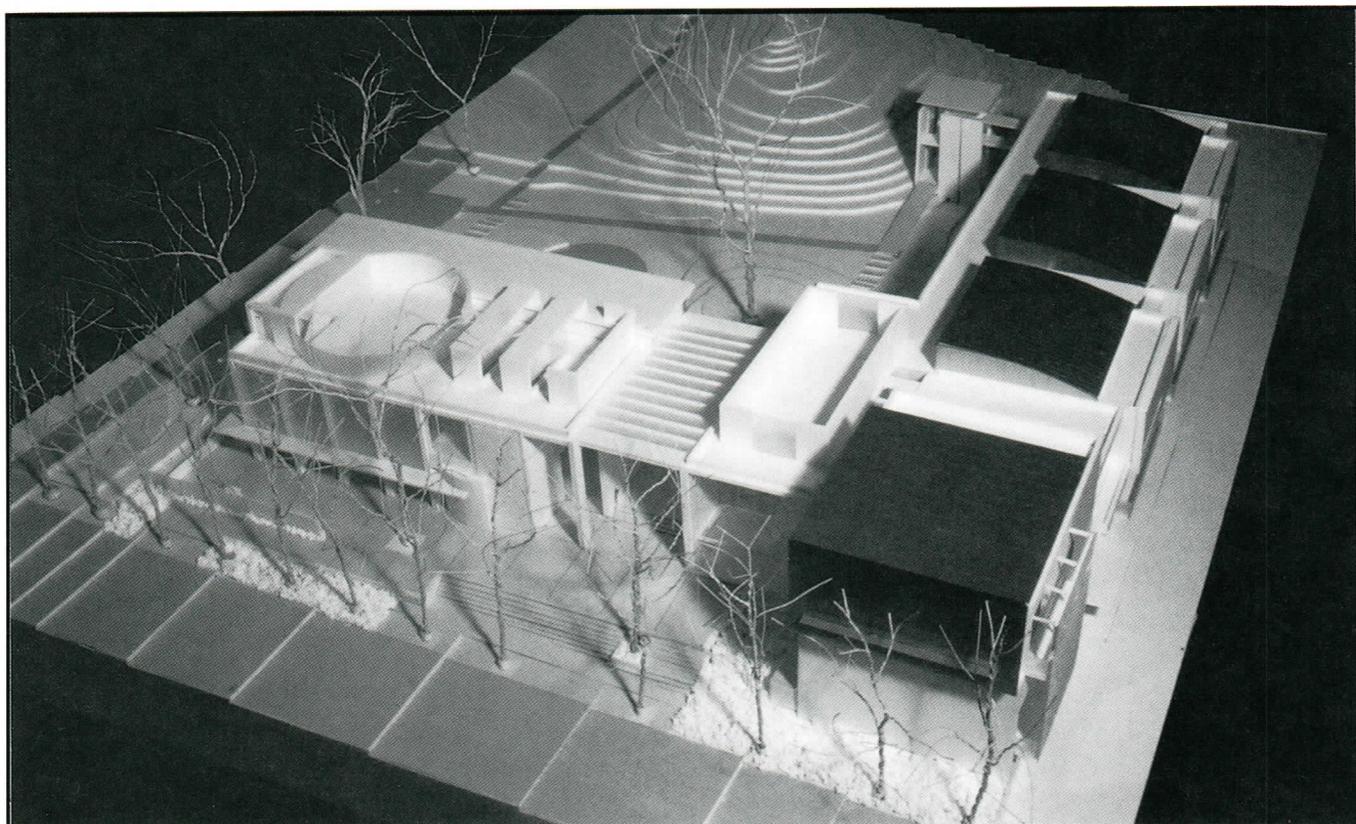
お申込み・お問い合わせは下記本校まで!

資格指導のエキスパート **総合資格学院 中部資格学院**

札幌本校 TEL 011-219-3511 FAX 011-219-3522
新宿本校 TEL 03-3366-2181 FAX 03-3366-3081
池袋本校 TEL 03-3982-8211 FAX 03-3982-7800
上野本校 TEL 03-3832-7201 FAX 03-3832-7250
横浜本校 TEL 045-316-6811 FAX 045-316-6841
町田本校 TEL 042-724-3061 FAX 042-724-3350

大宮本校 TEL 048-642-9811 FAX 048-642-9921
越谷校 TEL 0489-69-0611 FAX 0489-69-0711
千葉本校 TEL 043-290-7341 FAX 043-290-6981
船橋本校 TEL 0474-25-8941 FAX 0474-25-8940
中部本部 TEL 052-202-1751 FAX 052-202-1755
岡崎本校 TEL 0564-57-8161 FAX 0564-57-8191

岐阜本校 TEL 058-277-3701 FAX 058-277-3706
大阪本校 TEL 06-6374-1411 FAX 06-6374-4711
難波本校 TEL 06-6648-5588 FAX 06-6648-5548
神戸本校 TEL 078-241-1711 FAX 078-241-6711
広島本校 TEL 082-542-3811 FAX 082-542-3815
福岡本校 TEL 092-476-5611 FAX 092-476-5610



YAMAMOTO HORI ARCHITECTS

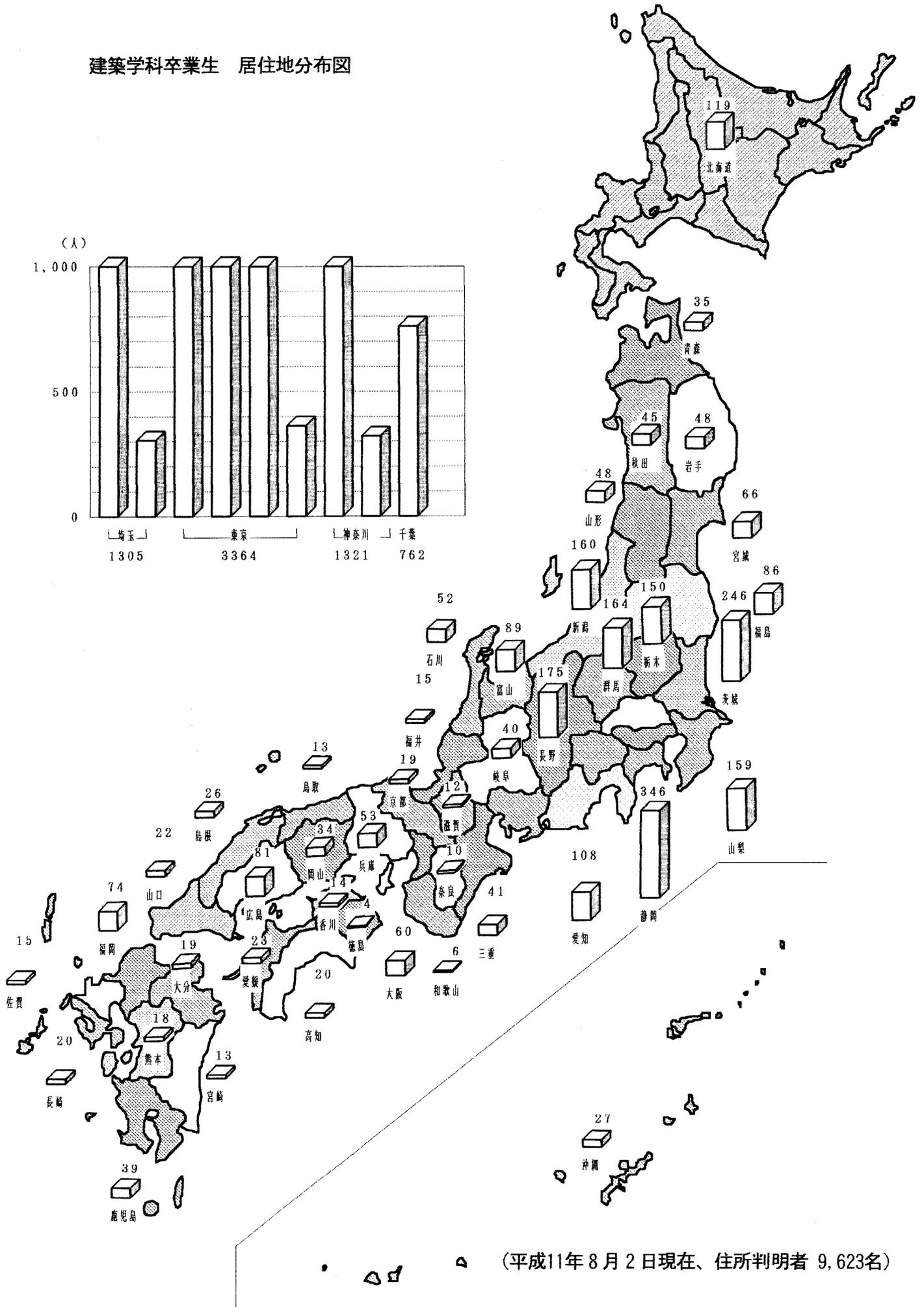
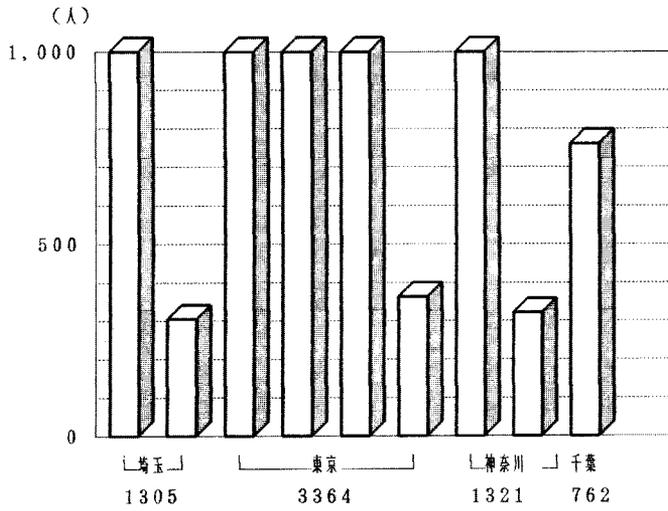
株式会社山本・堀アーキテツク

〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町29-18, A-9
tel.03-3462-0480 fax.03-3462-0481

八王子キャンパス
新教室棟

2000.4 供用開始

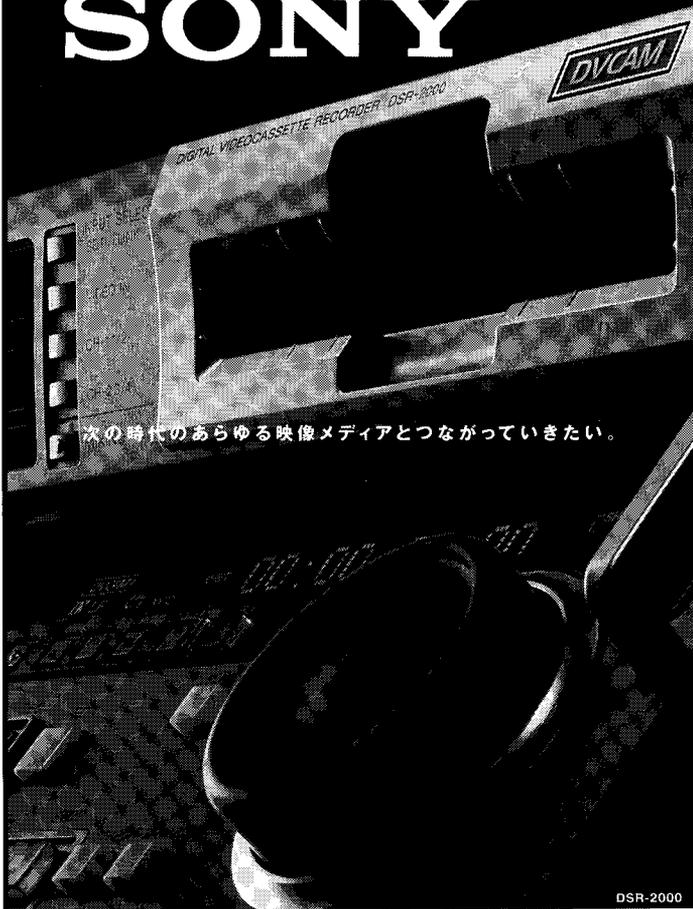
建築学科卒業生 居住地分布図



(平成11年8月2日現在、住所判明者 9,623名)

SONY

Digital Dream Kids



次の時代のあらゆる映像メディアとつながってきたい。

DSR-2000



次の時代のさまざまな映像を、ワイドに残したい。

DSR-500WS

DVCAM 第2章、はじまる。

これからのデジタル・ネットワーク時代を見すえ、新たに2機種をラインアップ。これまでの映像資産を生かしながら、つながる・広がる・進化する、ソニーDVCAM。

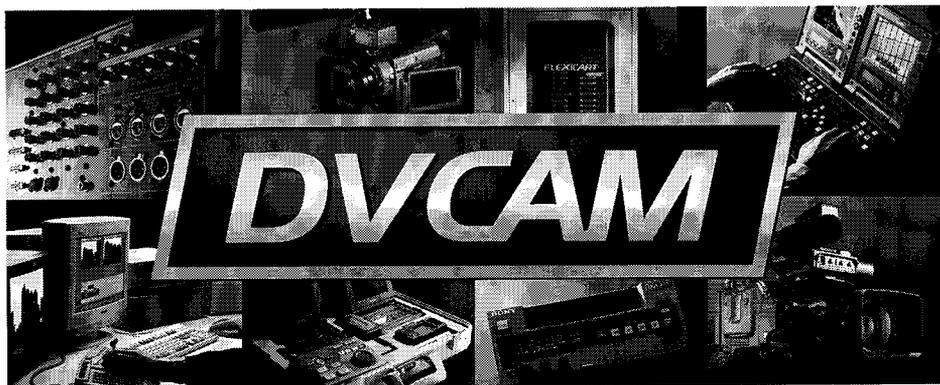
国内20,000台、世界75,000台。一般企業・学校から英国BBCなどの放送局まで活躍の場を広げるDVCAM。この数字*は、その性能とすぐれたコストパフォーマンスが映像のプロフェッショナルたちに認められた証といえます。そして、これからDVCAMがめざすのは、映像の過去・現在・未来をつないでいくこと。たとえば、アナログからデジタルへのスムーズな移行です。DVCAMは豊富なインターフェイスにより、お手持ちのアナログ資産を無駄にすることなくシステムアップが可能。そのうえ、i.LINKにより家庭用DVをはじめ、さまざまなデジタルメディアと自在に連携し、新しい時代の映像を広くネットワークしていきます。またDSR-500WSをはじめとして、ワイドスクリーン映像にも

対応し、16:9と4:3アスペクトのスイッチャブルも実現しました。DSR-2000では、来たるべくデジタル放送時代も視野に入れて、MPEGによる最先端のネットワーク化も準備。変化する映像環境に、先進のテクノロジーで応えていく。これからも映像の進化は、ソニーDVCAMとともにあります。

*1999年3月末現在 出荷台数 ※DVCAMはソニー株式会社の商標です。*i.LINK™はIEEE1394-1995仕様及びその拡張仕様です。*i.LINKは商標です。*画面はハメコミ合成です。*写真はイメージです。実際の表示とは一部異なります。●DSR-2000は、99年10月発売予定です。

DIGITAL POWER PRODUCTION

ソニーのプロフェッショナル・デジタル映像制作システム

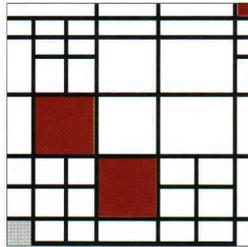


●商品を安全にお使いいただくため、ご使用前に必ず「取扱説明書」をよくお読みください。●「Digital Dream Kids (デジタル・ドリーム・キッズ)」は、ソニーの企業姿勢を表すスローガンです。
 ●この広告に記載の商品に関するお問い合わせは、下記までお願い致します。〒108-0074 東京都港区高輪4丁目10-18 ソニー株式会社/ソニーマーケティング株式会社 情報システム営業本部
 北海道営業所 (011)231-8121 東北営業所 (022)257-7830 東京営業所 (03)5792-2420 関東営業所 (048)652-8808 横浜営業所 (045)243-6711 多摩営業所 (042)575-0201
 千葉営業所 (043)297-8531 松本営業所 (0263)25-4551 新潟営業所 (025)270-3253 静岡営業所 (054)284-3601 東海営業所 (052)201-6871 北陸営業所 (076)240-8110
 関西営業所 (06)6531-4111 京滋営業所 (075)691-7860 神戸営業所 (078)322-0851 中国営業所 (082)241-9211 四国営業所 (087)822-5550 九州営業所 (092)741-2761

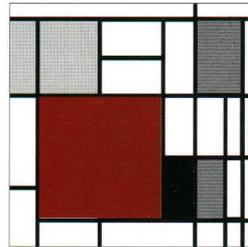
Sony Drive

<http://www.sony.co.jp/SonyDrive>

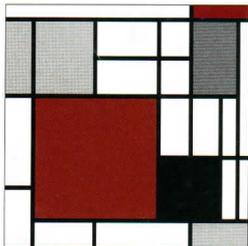
「ソニードライブ」はソニーの商品情報とライフスタイルをご提案するホームページです。



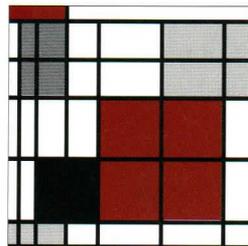
EAST ELEVATION
SCALE:1/200



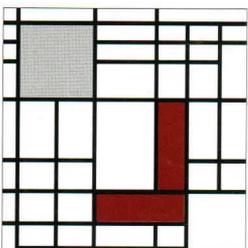
ROOF PLAN
SCALE:1/200



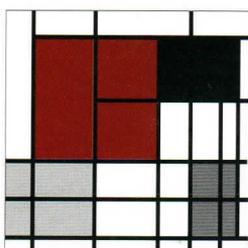
SOUTH ELEVATION
SCALE :1/200



NORTH ELEVATION
SCALE :1/200



WEST ELEVATION
SCALE :1/200



KOGAKUIN UNIVERSITY
1999